



壽

これが私の御狐様

河合曾良 狐パラレルアンソロジー

執筆一覧									
曾良×芭蕉	逃走アズ	天誅春ナオミ	運命船カジモト	運命船サバコ	運命船キヨコ	メタラズ千代松	ピグネネミィ	はだかハダカ	フグ子
水伊	みずのと	エチコメロン丸	黒ノラ伊佐見						
あゝ、こきあ	荒野小枕知寄	絵 手越原徹	とんねるシマ						
芭蕉×曾良	無糖飴	かしわぎもち	メラ嶋二	篝火タカライ	A'S 瀧費八十	C2 円谷ノブ	ジョ苑ヤシガラ	まはよしもり	黒ノラ伊佐見



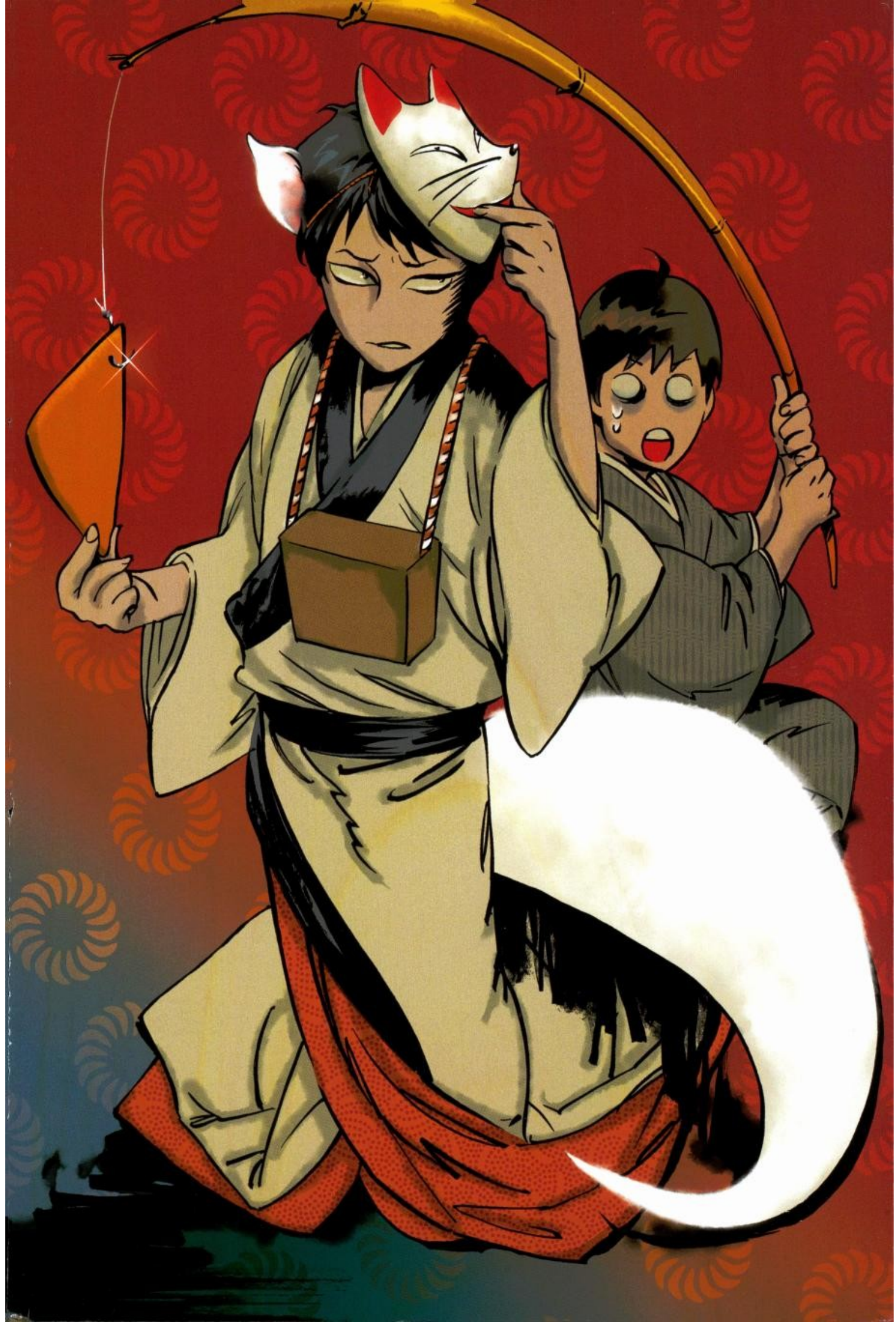
狐憑き
アンソロジー
の発行の
お慶び
申し上げます



おの
まじ
上ひ
の
シ
ン
ロ

つぎ
運

坂







ギャグマンガ日和 河合曾良 狐パラレルアンソロジー



これが私の御狐様

カラー口絵(こきあ)	〇〇五頁
カラー口絵(手越原徹)	〇〇六頁
カラー口絵(小枕知寄)	〇〇七頁
カラー口絵(シマ)	〇〇八頁
曾良×芭蕉	七拾壹頁
曾×芭執筆者コメント	七拾参頁
芭蕉×曾良	七拾九頁
芭×曾執筆者コメント	七四参頁
カラー口絵コメント	七四六頁
後書・奥付	七四八頁

これが私の御狐様

曾良×芭蕉

目

次

hadaka.....壹拾参

秘伝英霊の弟子

カジモト.....壹拾五

風の国の曾良郎

キヨコ.....壹拾七

覇王に僕はなる！

千代松.....壹拾九

勝り言中

春ナオミ.....貳拾四

コンコン曾良くん

ア　ズ.....貳拾七

理想の世でも男装

水　伊.....参拾四

綱はフコと囃く

メロン丸.....参拾八

新弟子フォックス伝説

フグ子.....〇四拾

たじたじ

ネネミィ.....四拾六

換装

みずのと.....五拾壹

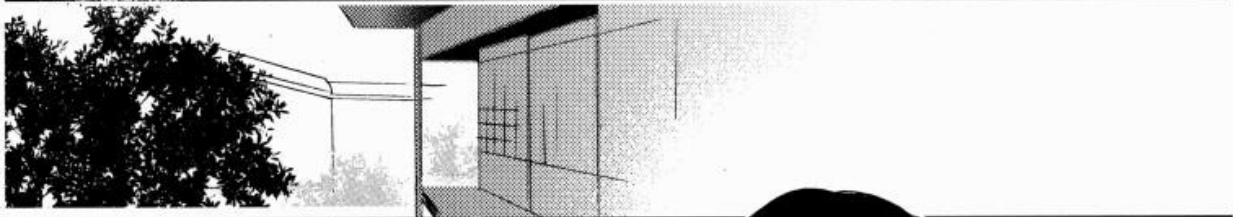
お綱殿が見てる

伊佐見.....五拾九

赤ひきつねと緑の薔薇

松尾芭蕉の弟子

hadaka





後 日



終



おつかしいなあ

さっきの「
何処行ったんだろ

あ！

みつけたー!!

ゴ

ゴ



可愛いなー
狐のコだあー

なで なで

めずかしい

0

...



君どこから
来たの？名前は？

ええ
ええ

イラッ

カッ

狐の国の曾良くん



それでは
行つてまいります
芭蕉さん

えっ何?いきなり
何処に行くのさ
曾良君!

血で血を洗う
「狐の暗黒武道会」
ですよ

何なの!?
その怪しい大会!

狐王に僕はなる!

キョコ

血で血を洗う
「狐の暗黒武道会」とは、
王子稲荷の北方に
そそり立つる木々
そこへ狐たちが年に一度集り
最強の狐を決定する大会が
開催される。
これが世に言う
「狐の暗黒武道会」である
この日のために狐たちは
日々鍛錬に
励んでいるのであった

それすこぶる
物騒じゃないの!

ぐわい、ひえええ

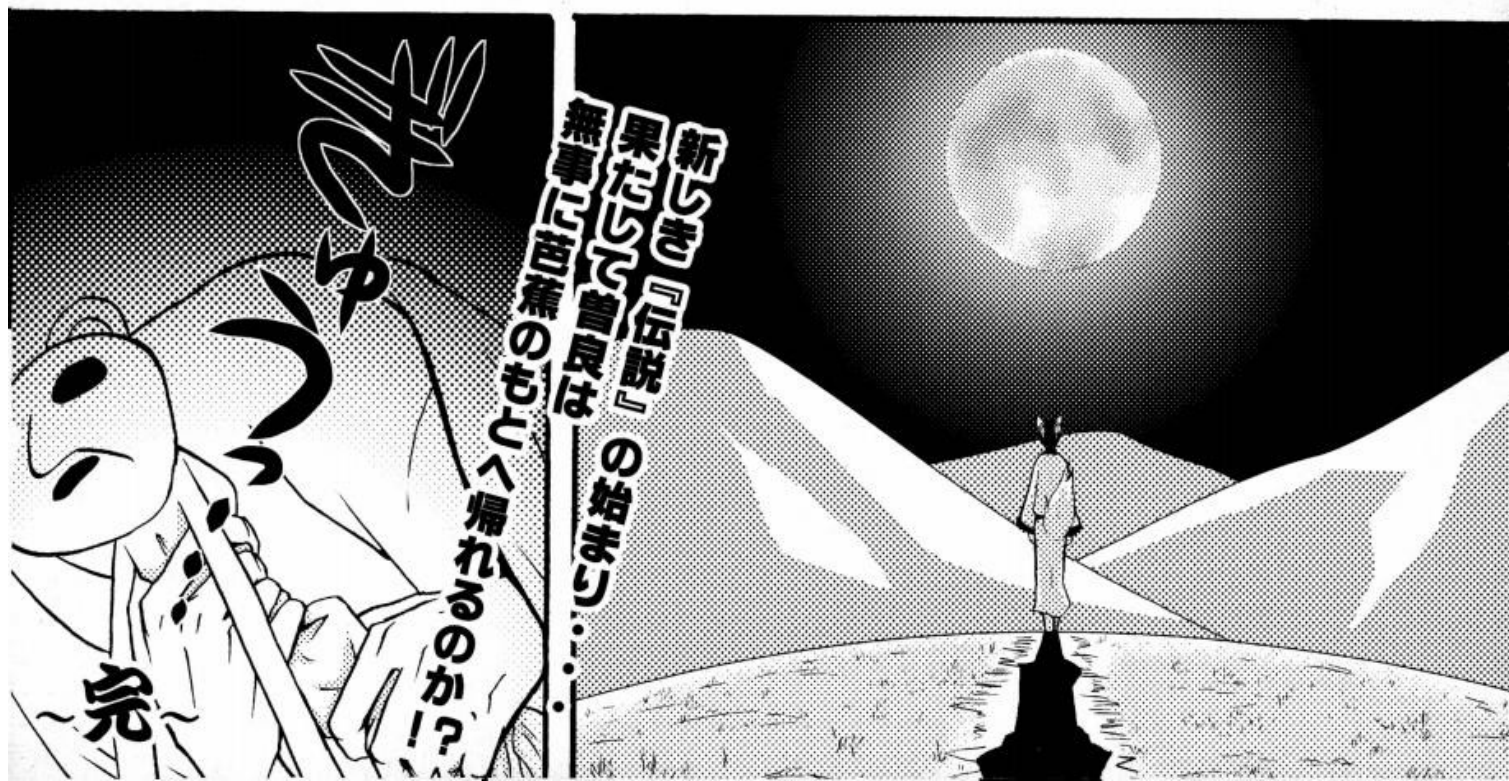
駄目だよ!
そんな
危ない大会出ちゃ!
怪我じゃ済まないよ!

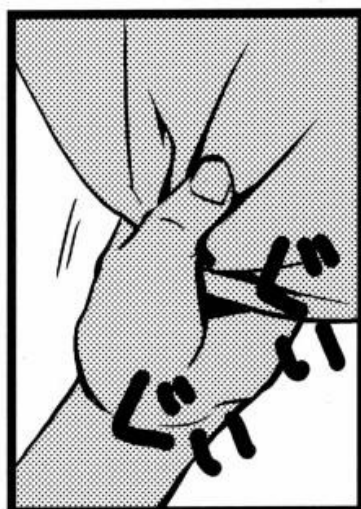
頼むから
行かんといて!!
曾良くん!!

あーあーあー



8









子供に手出して
最低ですね
警察呼びますよ

曾良君！
良かった！
待ってたよ！

!!

あの子供が
すごく凶暴でさー

それ…
流行ってんの？

???

夢だった

いてー！

ガバッ

おふっ

ホッ

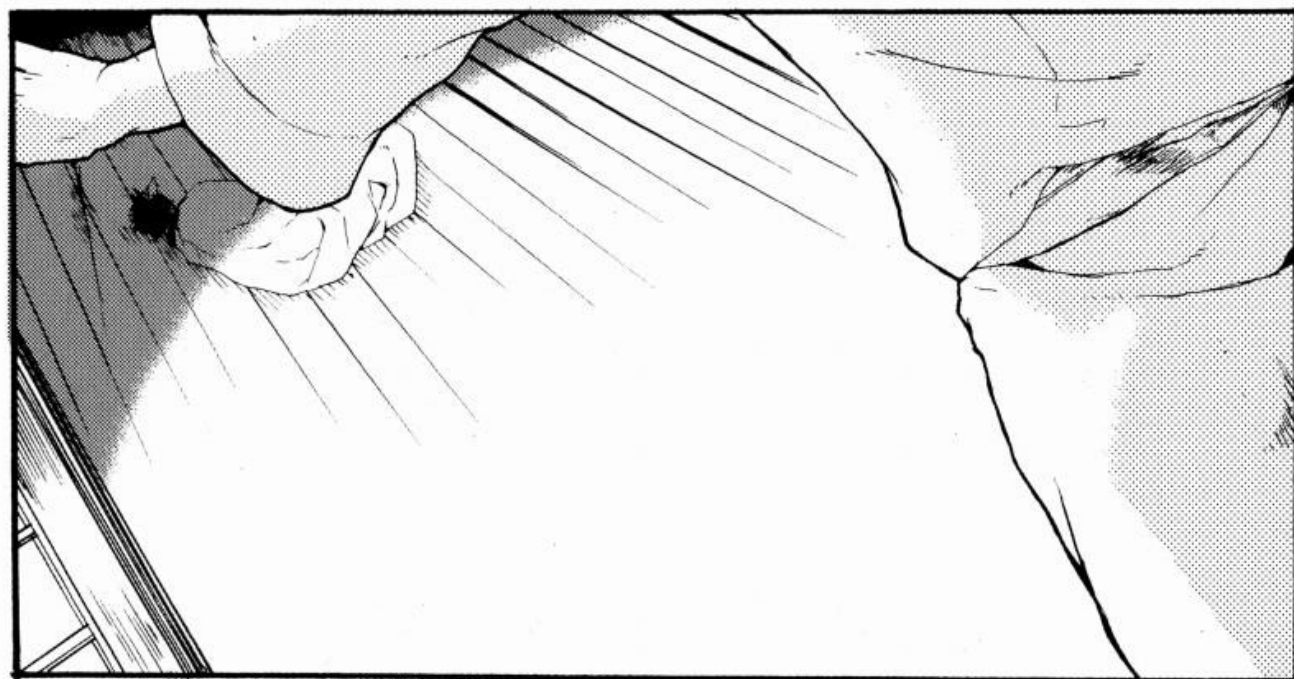
化かされました。 終





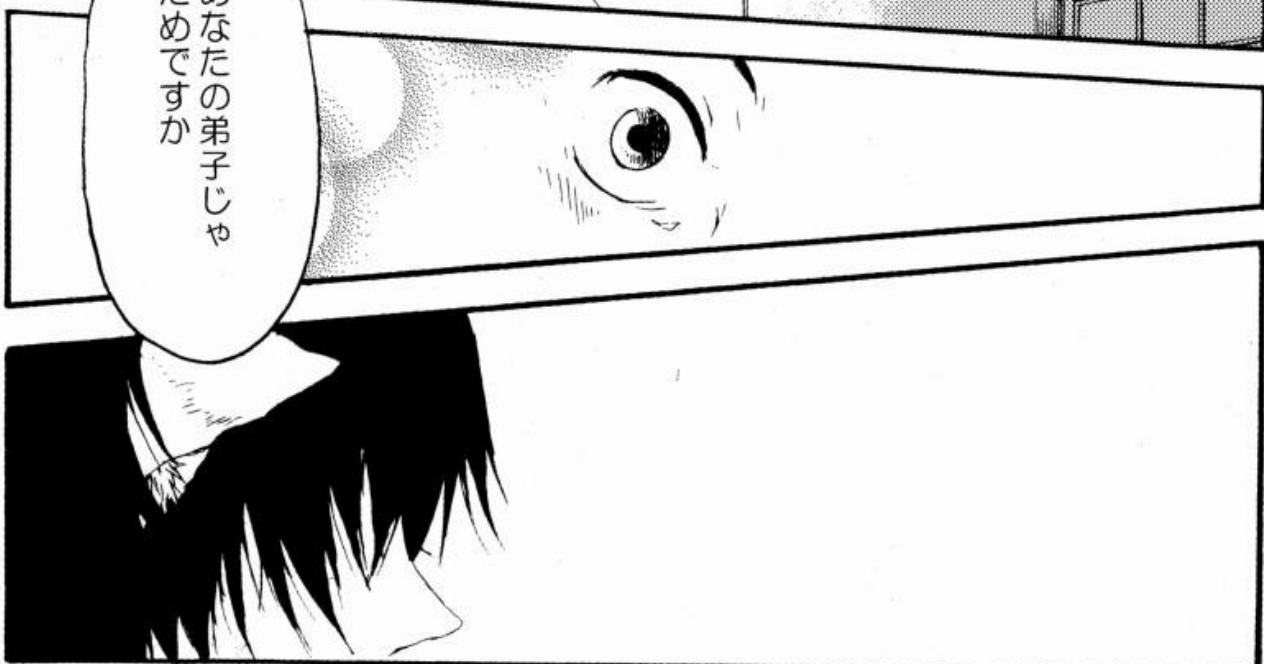














END









ではこれから
よろしくお願
致します師匠

パニッ

えっと……
み……耳……
曾良くん

よろしく
ネ……

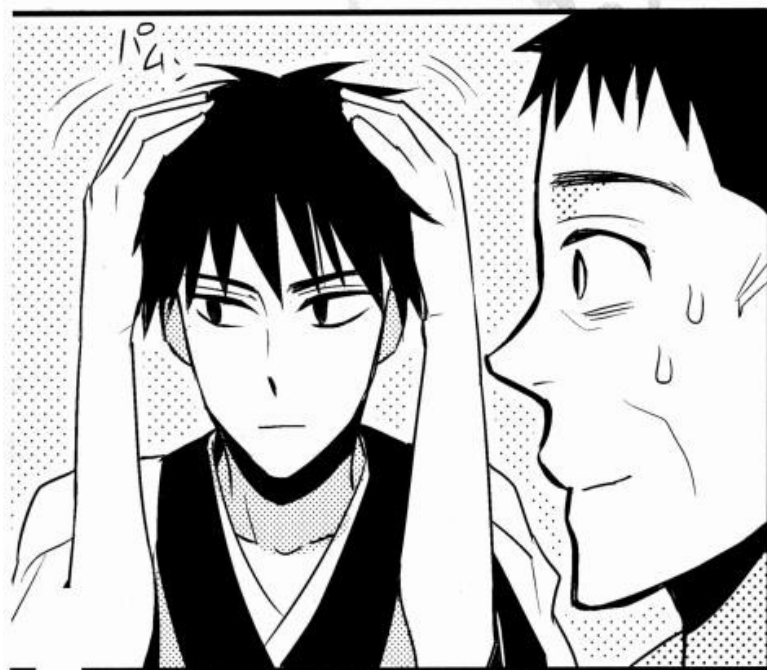
あ……うん

じー……

新弟子
フオックス
伝説
イマイ題字・メロン丸

えっとこつちが
客間で……

何見てるん
ですか







僕だって
驚いて
いるんですよ

前の僕は
それほど
あぶらが
好きでな
かったし

一度死んで
仏門を捨て
この道に入り

……..
再会を
許された時は

こうも
愛しき物で
あったかと
さすがに
感動しました
けどね



他に何が？

あぶら
げの
話だね…

……..
曾良君…

チクショ
ー
何でも
ないよっ

一八四三年
俳聖 松尾芭蕉は
百五十回忌に
「花の本大明神」の
名を承け神となる

俳句流行を過ぎても
彼の言葉の輝きは
失われず

それはまるで
世の人間達によつて
信仰のように
決定した

……



そこらに沢山
像も建てられて
いいご身分じゃ
ないですか

洗濯物が凶器に
なるなんて
知らなかったよ
コンチクショー!
最悪のご身分だよ!

固く絞り
ましたからね

鬼!

狐ですよ

そんなのは
見れば……

へん

おかし

どうしたん
ですか

旅が

……
したいよ

……
うさぎ……

わ…私
こんな風に
祭り上げられ
なくていい

成績が悪くても
わんぱくに
句が詠みたい

……
それを
僕にだけ

聞かせて
くれるなら

お供しますよ

ええっ

まつお
お社から
出たっても
いいの!?

いいんじゃない
ですかどうせ
大した御利益も
ないことですし

いや多分
俳人の頼みの
綱だぞ!

松尾芭蕉の
再来は
この世にない

神になると
いつことは
人の輪廻から
外れると
いうことだ

ヒヤツホ
やった
!!

じゃあ
明日にでも
早速出発だ
曾良君どこ行く!?

そうですね

実は曾良君
松尾のこと
結構好き
なんじゃない

吉岐島なら
僕の庭ですよ

ど……
どこの
島なの!?

おわり

この光景は

今まで 何度も見た 気がした

この先 何度も見る 気がする

挽歌

ネネミイ

一面の焼け野が原でした。黒煙蒼天に立ち昇り、皆々灰燼と成り果てて、それはまさに現し世の地獄でした。けれども僕はその惨状に於いて、至極甘美な追憶に浸っていたのです。僕の背中に、温かな身体が負われていましたから。

貞治四年、夏。長きに渡る南北の朝廷の確執は、足利將軍尊氏公と直義の衝突、観応の擾乱以降、周辺諸国に多大なる余波を広げていました。以来十余年、国は益々荒廃し、古き権力は新たな実力と相対し、犠牲ばかりその数を増している有様でした。

斯様な時代にあつて、この人は異形に映りました。

「…本当に、耳があるね」

ふわり、と彼は僕の尖った耳に触れました。

「へんなの、これは誰にも見えないんだ」

彼は、くつくつと特徴ある声で笑いました。僕としては何より、『耳が見えている』ことが心外でした。

ひと月ほど前、僕は獵師の罾に掛かっていたところを、この人に助けられました。恩義を感じない訳ではありませんが、何よりも人間に対して借りを作ってしまったことが、何とも無様で嘆かわしく、その返済の為に人のなりをして彼の元へ参ったのですが、彼は僕の姿を見るなり、あの時の狐だね、と微笑んだのです。妖術は我乍ら長けていると自負していた僕は大層氣落ちしたのですが、彼はやけに愉快氣に僕の黒髪の間に見く耳を触っていました。氣持ちの良いものではありませんでしたが、彼が喜ぶならと黙って為すが儘にしていました。しかしあまりにしつこいので、終いに頬を打ちました。

「そらくん」

そら、と云うのは彼が付けた僕の名らしいです。その由縁を尋ねると、響きが優しいから、と答えました。おそらくは、旻、或いは霄と書くのでしょうか。彼は澄んだ空が好きでしたから。

僕は程なく、彼の生業の手伝いを始めました。元より人間の暮らしなどとは関わる心算はありませんでしたが、借りた恩義に何もせぬなどと僕の矜持が許しませんでしたし、所詮傷き人の命です、数日数月あまり過ぎたところで、僕にとつてはほんの須臾の時なのですから。

彼は刀匠でした。彼の生み出す曲線は滑らかで、砥いだ刀身は秋月を映す水鏡のようでした。彼の刀は実に有用で而も

美しいと噂が噂を呼び、遂には北朝の名族の頭領から直々に、彼の刀を所望するとの達しがあったそうです。人斬り刀に美しいも何も、と彼は苦々しく笑っていました。

彼は自らの仕事に誇りは持っていたようですが、ある時、ふと僕に話してくれたことがあります。

「時代が儘ならないからね」

梅雨晴れの小道で、くるりとおどけた調子で彼は踵を返しました。

「私は歌が好きなんだ。君は西行法師って知っているかい？ 隠居して彼のように放浪して、歌の心を開くことが私の夢なんだ……いずれね、いずれ……そうなればと思ってる」

彼は再度、呟くように言いました。

「儘ならないね」

歌を詠む、ということは、この戦乱の世にあっても難くはないのではないですか。僕が素朴にそう言うと、人の心に平穏がなければ、歌は真には届かないんだよ、彼は子供染みた手慰めに野花を弄りながら、年相応の瞳を伏せて言いました。

「私はね」

彼は薄紅の野花をそつと手折りました。

「言葉というものは、刃のようなものだと思うてる……無垢な聖刀、神聖な言の葉……幾代も人を斬った妖刀、血腥い詞……どちらも生々しく、人の心に訴えかけるものだ」

彼は花卉を陽光に透かしました。薄紅は蝶の翅のように、繊細に風に靡きました。

「美しいだとか醜いだとか、そんな杓子で測れるものではないものだ……ある意味絶対必要で、ある意味不要なものだ」そんな彼の言動がやけに理屈くさく神妙に映り、何故だか僕は不愉快になりました。僕の顔に不平を見たか、彼は取り繕うように笑いました。

「そうだ、じゃあ一つ歌を教えてあげよう」

僕が返す前に、彼は勝手に諳んじ始めました。

「そうだね……山振の立ち儀ひたる山清水……酌みに行かめど、道の知らなく……どういう意味かって？ これはね、万葉の挽歌なんだ」

よりによって暗い歌だね、と彼は笑います。

「挽歌、死者を嘆き、送る歌……これはね、亡き恋人を偲んだ歌だよ。でも、『妹』という呼びかけはない……きつと、言うに憚る秘めた恋だったんだね。『道の知らなく……その人が死んだことで、初めて激しい恋に気付いたのかもしれない。亡くしてから、気付いたんだね。けれどもう、どうすることも出来ないんだ……』」

僕は外見では領き、心底ではいまいち合点が行かず首を傾げていました。と云うのも仕方なく、これは三連首の末首で、前の首の説明が無ければ、当然その意を汲むことは出来ない、と云うことは、後に判ったことです。

以来、彼は僕を歌の弟子とでも見做したか、夕餉の仕度の

折、鍛冶の手を止めた折、夜半と事ある毎に僕に指南を続けました。僕としては、有難迷惑もあつたものです。そもそも人間と云うものに対した興味も無く、蜻蛉ほども生きられぬ命で何を訴えるかと、莫迦にしていましたから。しかし、彼らの詠んだ歌を知るうち、彼らはその命を承知の上で生きているのだろうか、と思ひ始めました。されば何故、儚き命に耐えられるのか：永く現し世に漂う僕には解る術も無く……その時、ふと。僕は僕自身の得体について想いました。僕は、狐として生を受けて：幾年幾世、妖としてこの穢土に留まり続けました。僕は何者か。或る人の云う様、稻荷明神の御先なのか、はたまた畜生道の成れの果てなのか。自分の来た道行く末、総てに頓着が無かつた：否、忘れていたことに気付いたのです。僕は俄に、不安になりました。その度、意味もなく彼に突つかかつては鬱憤を晴らしていました。彼は面白いほど仰々しく反応し、僕を楽しませました。けれど、そのやり取りの後には必ず、僕の耳に触れて額を寄せ、大丈夫、と囁いてくるのでした。険呑だ、と僕は齒噛みしました。しかしそれは穏やかな日々でした。甘い時間でした。僕は認めたくはありませんでしたが、人である彼に確かに惹かれ始めていました。ただ、もう少し彼と居たいと想いました。彼も同じ気持ちだったのでしょうか。知る由はありませんでしたが、彼はいつも僕の側でくるくる笑っていました。

嗟、現し世の儚さは、厭きるほどに知り乍ら。

盛夏でした。僕は裏山で冷たい水を汲んでいました。川のせせらぎで顔をすすぎふと目を落とすと、水面に銀色の毛並みが映っているのにぎよつとしました。僕は自嘲しました。いつの間に、僕は人の姿に慣れてしまつていたのでしよう。それもこれも、彼の所為だ：僕は頭を振りました。けれども心は、極めて温かいのです。

桶を手にした途端、けたたましい馬の嘶きが聞えました。それに続く鬨の聲。僕は驚いて桶を放り出し、声のする方へ身を屈めて走つて行きました。川の中流、対岸には夥しい軍勢が並んでいました。南軍です。更に反対の山の手には、北軍が町を挟む形で連なっています。

そんな、まさか：町を戦場にするつもりか！

僕は飛び出しました。無我夢中で、駆けました。素足になつて、四つ足をついて、獣の姿で走り続けました。人間とは、斯くまで莫迦なものか：憎しみ：蔑み……然様な想いは野を駆け、川を下り、崖を越えるうちに薄らいで行つていました。ただ、心にあるのは一念：如何か、後生だ、この身上総て捧げて善い。如何か：無事であつてくれ。

無数の火矢が町に降り注ぎました。瞬く間に紅蓮の炎は町を覆いつくし、火薬の匂いと朽木の焼ける匂いが僕の鼻につき、悲鳴が耳に飛び込んできました。

阿鼻叫喚の地獄。血を流す兵、逃げ惑う人々、屍……僕は
吼え叫ぶ彼らの足元をすり抜け、一心不乱に粗末な庵へと駆
けて行きました。

瞬間、僕は愕然としました。庵は屋根が焼け落ち、折戸の
あった所には炎の柱が立っています。僕は獣の、声にならぬ
声で叫びました。流矢の如く飛び込み、銀の毛並みが焦げる
のも気にせず、必死で彼を探しました。

「ごう、と大きな音がして柱が焼け落ちました。と同時に、
げほつと咽る音が聞え、僕はそちらに飛んで行きました。

「……そらくん、だね」

果たして、彼は崩れた土壁に半身を敷かれ、僕の方を見て
力なく笑いました。烟を吸ったのか、声も途切れています。

「因果な……生業だ、ろく……な死に、方はしない……って、思っ
てたけど……ふ、ふふ……刀匠、なのに……刀に斬られて、は……
死なないん……だね」

僕は何も答えず、夢中で土壁を跳ね除けました。彼に擦り
よると、彼は徐に僕の耳に触れ、するりと獣の首筋を撫でま
した。

「き、れい……そらくん」

息が弱まっていました。僕は人なりに化け、彼を背負いま
した。彼は驚くほどに軽いので、僕は尚更焦りました。

彼を背に負い、戦火を潜りぬけ、裏山に入り獣道を行きま
した。彼の心音が次第に弱まっています。僕は如何すること

も出来ず、ただ無言で入り組んだ道を駆けました。

ひらけた丘の上に立つと、町の景色が眼前に現れました。
黒と、赫しか見えませんでした。僕はゆっくりと彼を降ろし、
地面に横たえました。蓬の葉を擦り込み、水を飲ませました
が、彼の吐息は更に小さくなっていきました。

僕の力を以ってしても、叶わぬことがあるのです。この、
目の前で絶えゆく愛しい人、ひとりだに救えないのならば、
僕がこの世に永らえる力など、何の意味がありません。

身を焦がすほどの痛恨に耐えず、僕は項垂れていました。
ふと、耳元に滑らかな感触があたりました。彼はあの仕草で
僕の耳に触れ、微かに口の端を上げていました。乾いた息を
洩らしながら、彼は声を絞り出しました。

「……うた」

僕は彼の手を掴み、ぎゅつと握りました。

「うたって、そらくん……」

そしたら、げんきになるから。彼は強いて、口を開いて笑
いました。

僕は唇を噛み、やがて顔を上げました。

……高山と……海こそ、は……山ながら、斯くも現しく……

「……海、ながら……しかまこと……ならぬ」

彼のか細い声が重なります。思わずこの歌を選んでしまっ
たことを悔いしましたが、彼は泰然と虚空を見つめています。
炎が焦がす音も戦の声も聞えては来ませんでした。

人は、花物そ……うつせみの、世人……

煙る草木の匂い。翳る陽射し。挽歌。

彼は静かに息をしていました。お腹がすいたよ、と洩らした彼に、岩魚を獲ってきました、と囁きました。少し休んでいてください、そう言うのと彼は頷いて双眸を伏せました。

僕は彼の手をずっと握っていました。

ふと、地面に何かが滴り落ちました。小川の清水より温かい雫が頬を伝い落ちてきました。漸く、これが何であるのか理解しました。いつからか知らん、穢土に漂うようになってから、初めて、僕は涙を流しました。そしてその時初めて、僕は人の心を知りました。或いは忘れていたそれを、思い起こしました。短き命を、争い、相互いに傷付け、深く愛し、それでも尚、生きようとする。その所以を知りました。

そして、僕は。もう良い、と想ったのです。永らくこの世に留まり続けることを、或いはこれを知るために僕は彷徨い続けていたのかもしれませんが。

もう良い。

そう想った途端、僕の身体からすうっと力が抜けていくようでありました。視界が霞みました。ただ彼の手だけを握り続け、僕は目を瞑りました。

「夏草や、つわものどもが夢のあと」

どうつ？と振り返った芭蕉は、虚ろに遠くを見つめる曾良に肩を落とした。問いかけると曾良は、さわさわ流れる草原を眺めたまま、

「いえ、少し……別のことを思い出し……考えていました」

「なんだよつ、白昼夢？もうボケてんの？」

「さあ……」

曾良はいやに素っ気無く、夢現の表情で眼下に広がる夏の野を見遣っている。芭蕉はじつとその横顔を見つめた。

不意に、芭蕉の手が伸びた。頭の頂きから耳元にかけて、すつと黒髪を梳く。

「……なんですか」

「さあ……」

くつくつと芭蕉はくすぐるように笑った。

「いや、なんとなく……前にもこんなことあったかな、って」

曾良は怪訝そうに首を傾げ、荷物を掲げた。

「……行きますよ、芭蕉さん。経堂も見ると良いでしょう」

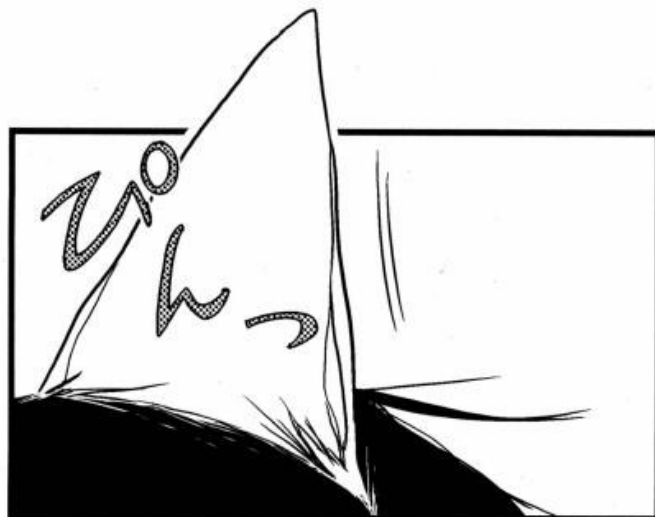
「あ、うんうん！」

曾良がさっさと歩みを進めるのは、駆け寄って歩幅を合わせる芭蕉が見たいからだ。思惑通り、走り寄って来た芭蕉はとん、と軽く足踏みして隣に並んだ。

夏草薫る風の中、二人は肩を並べてどこまでも歩いて行く。

お狐様が見てる
みずのと





次の日――



曾良君に
耳と尻尾が生えた



52



あ、あの...

曾良君...?

これは何の
マネですか？

確証も無〜ッ!!

わ、私
何もしてないよ？

マヤーか、
流石のマッスオモ
そんな超常現象
引き起こせないよ!?





なんて…

暫く
見てたいなーっ

そわそわそわ



照れてる？

あれ？
曾良君…



何でも良いですから
早く直して下さい
…いいですね？

はっ





きつと、あの時
お稲荷様が
聞いていたんだ

曾良君も
お前くらい
分かりやすければ
いいのにね？

5



…暫くして、
曾良君の耳と尻尾は
消えてしまったけど

私はちよつとだけ
無表情な弟子のことが
分かるようになった



8





目があああああ
目があああああ
あああああ



もうこの
おっさんに
するか...

いきなり
開けるなんて
失礼ですよ
.....ともかく

おめでとう
ございます

トランス
何が!?

めでたく
魔法少.....

中年に
選ばれました

いやな
間の取りかた
するね
君.....

まだまだ
おっさんなんて
呼ばせないよ!

だいたい君
なんなの
魔法少年って私...
結構ギリギリ
じゃない?

きつね
うどねの
精ですの

予想以上に
バカな
ようだ...



トムとジェリー

日本中の少年に
謝らせたい
ところですが
とりあえず

アンタを
魔法使いにして
あげますよ

マジで!?

三十年生きてて
この歳になって
魔法が使える
ようになるとは
思わなんだ...

.....
良かった
ですね!

願いごとを
言いながら
お湯をかけて
ください

っ!!
だから!!

金持ちを
願おうが
モテ男に
変身だろうが

何でも
叶います

ただし

使えるのは
一度きり
ですけど

.....
なんで
願いを叶えて
くれるの?

人間が
墮落していく
さまを
見たいので

性格
悪男!

うるさい
ですね



一生好きな俳句を
詠んでいられるのに

それは
いいや…



そういうのは
なんか違う
からさあ

ねえ
よかったですら

一番さいしょの
弟子になってよ

俳句っていうのは
五七五で
できてるん
ですよ

知ってるよ!

ザン

…知って
ますか

はたして
天才の才は
あつたらしい

作る句は
9割がたは
ろくでなし
なかつたが

それでも
残りの1割
は光り輝い
ていた



(2回目)



ねえ

耳...
触っても
いい?

んズ

だんだん
有名になつてきた
気がする

ウザい...

それより
願ひごとは
まだですか

ん...
まだ
考え中

今日こそ
触っていい?

えーと

カレンダー

めくり忘れて
一気に破る
二ヶ月分

ドウ?
この句

この
季節感
情緒満男?

最悪ですね

月日が
過ぎ



彼の周りには
人が集まる
ようになった



ええっ
弟子入り?





あとで
のぞいてみよう
かなー……

あーっ
今行く
今行く！

世話
やいてみる
子が……
ほい……



時間
切れか

意外と
保つたな

でも



やかましい
ですね

聞こえてますよ
バカじじい

あつ
出てきた

かたつむり
の！

ねーっ
おおい
出てきてよ

もう一人じゃないし
平気だろう



えっ
なにに？

まあ
単刀直入に
言うと



ちね
ちよっ
聞いてよ！
新弟子が！

僕も丁度
話がある
ので



え？

ゴメン
よく聞こえ
なくって

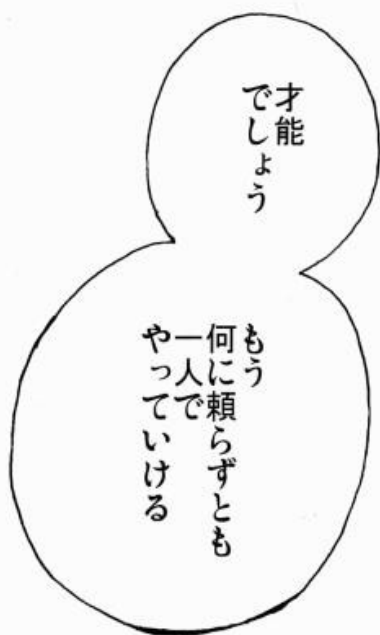
ハロニイタン...

もっと
耳の通りを
良くして
やろうか……

イヤァ



お別れです





切れるん
ですよ

賞味期限



うどんな
だけに!!?

もどろ
ん

開封済みで
保ったほう
ですよ?

いくら
冷暗所
とはいえ

そろそろ
カビそうなので
帰らせて
いただきます

ええーっ
湿気は
乾物にとって
死活問題
だけど!

まさか
そんな
理由とは...



ううっ
なんとか
引き止めたい...

決めた...!



私の願いごと

この子が
人間になつて

ずっと一緒に
いてくれます
ようにっつ
!!!

めいふどす

服が!

私が一体
何をしたと
いうんだ...

あっ

はたしてそれから
どうなったのか

芭蕉さんの
世話を焼く
弟子がいつのまにか
増えたらしいと

名前は
芭蕉さんが
付けてあげたと

うそかほんとか
狐につままれた
ような
おはなし



おしまい.

松尾芭蕉の弟子

hadaka

壹拾参頁

曾良くん狐本
発行おめでとう
ございます

hadaka

<http://rio-de-janeuro.bliss.holy.jp/> はだかにはならない



狐の国の曾良君

カジモト

壹拾五頁

狐

アンソロ発行
おめでとうございます!

そしてありがとうございました!
百戦無きモノが色々揃って
大変に面白かったです!

カジモト

<http://umbra.zombie.jp/> 運命船サラバ号



狐王に僕はなる!

キヨコ

壹拾七頁

アンソロ発行
おめでとうございます!!

キヨコ

ふっさふさの尻尾が
かなりいいんだぜ。
そう確信することが
できました。
気付かせてくださって
有難うございました!

<http://umbra.zombie.jp/> 運命船サラバ号



独 り 言 中



アンソロ発行
おめでとうございます。
最初話を聞いたときは
何事かと思いましたが
伊佐見さんらしくて
良いと思いました。

千代松

千代松

老拾九頁

メタライズ <http://blog.livedoor.jp/metalize92/>

コ ン コ ン 曾 良 君

河合曾良バレルアンロジー『これが私の御狐様』

動物の発情期は見てて
ちょっとショックですが
曾良くんが発情期だと萌えます。

アホなの描いてすみませnでした。
でもこうして楽しく参加できた事、
嬉しく思います。有難うございました!

春ナオミ



春ナオミ

式拾四頁

天 誦 <http://767g.gozaru.jp/tentyu/>

何 処 の 世 で も 仮 装

アンソロ発行
おめでとうございます!!!!!!

曾良お狐様に参加できてうれしいです へー
狐にあげは鉄則だと思ってたのでかけてよかった…(^^)
参加させていただきありがとうございました!



アズ

式拾七頁

縫 走 <http://acme.sub.jp/st/>

狐 は コ ン と 鳴 く

水

伊

参拾四頁

狐曾良君アンソロ発行
おめでとうございます

お誘いいただき、本当に
ありがとうございました！
日和で原稿描くのは初めて
だったのですが、とても
たのしかったです。
そして大変ご迷惑を
おかけしてしまひすみませんでした・・・



そのおいなり
どうしたの？



何故こんな事に
なつたので
しょうか？

<http://grnmz.fc2web.com/>

新 弟 子 フ オ ッ ク ス 伝 説

メロン丸

参拾八頁



プ ラ ス チ ッ ク イ コ ー

た び た び

フグ子

四拾頁



昔あるおたのしみはしてあります！
うちまで持て来てもいいぞ！

フグ子



挽 歌

お誘いありがとうございました！未だに畏れ多くて焦点が定まりません…その挙句、目測を誤りまくった毛色ですみませんでした；；少し補足ですが、貞治年間は芭蕉さんが活躍する、丁度3百余年前。そしてそれから3百余年後…つまり、現代！どこかに！！芭蕉さんと曾良君が居るかもしれない！！なんてブッ飛んだことを考えていました（笑）曾良君が狐耳だなんて、なんとオイシイ設定でしょう…！全然生かせなかった／(^-^)\訳ですが、枯れ木も何とやらとプラスに考えることにします。本当に有難うございました！ ×××ネネミイ

ネネミイ
四拾六頁

p i g g y & f r o g <http://p-f.vivian.jp/>

お 狐 様 が 見 て る

途中から、自分が描いているのは曾芭なのか、芭曾なのか分からんようになりました…アイデンティティ崩壊！でも楽しかったですありあとあした!!



みずのと
五拾七頁

M I Z U オ フ 支 店 <http://www012.upp.so-net.ne.jp/MIZU/>

青い弟子と緑の師匠(曾芭)／きつねちゃん(芭曾)



本当に♡
ありがとう
ございました!!
もう本になるのが
楽しみすぎる
いそいで…
暮みたい…!!!

伊佐見

五拾九頁
参参参

黒 バ ラ <http://vivian.sakura.ne.jp/kb/>

芭蕉×曾良

目

次

よしもり……………七拾九

転贖のススメ

かしわぎもちこ…八拾九

おいなり伝説阿含

kmps……………九拾参

ルニタツタ

円谷ノブ……………九拾八

ゆめのまにまに

ヤシガニコフ………壹〇参

奥細瓶「手袋を買いに」

嶋 二……………壹〇七

亭道中

タカライキヌヨ…壹壹八

桐雨ノ後、虹立

伊佐見……………壹参参

きつねちゃれ

瀧賀八十……………壹参六

朝も風も夜も！きつねせらくれ

飴……………壹参八

眉唾話

~~~~~

~~~~~




転職の ススメ

(題字・よしもり)



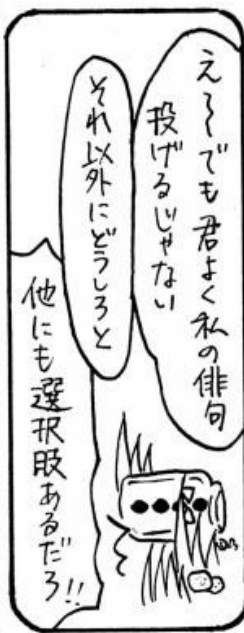




3分後

















END

昔は今と違い
旅をするのにも
随分危険な思いを
したそうです

おなげん哈

かしわぎもちこ

だからって旅に弟子が
誰もついてこないって
どうゆうことなんだよ
折角このスーパードン
誘ってあげてるのにイ

でもこのまま行くハメに
なったらどうしょ！
神様お願いします
なんとかして下さい

その願い……
叶えてやろう

まあ良い
お前の望み通り

パーフェクトな弟子を
出してやるぞ

天から声が……これ
もしかして神様？

いかにも私は
ここに奉られている
稲荷明神だ

うわあ！そしたら
イケメンで賢くて
力持ちで可愛くて
優しい弟子がいい！

ひとつに絞れ！



はじめまして

下半身が

尻尾と耳は
いいとして

なにそれ

丸出しじゃん

隠しなさいよ！

なんなんですか
人を呼び出しておいて…
文句ばかり言うなんて
非常識ですねまったくもう

君の格好のほうが
非常 ですけど



そんなこと言ったって着物に
穴を開けるのは嫌ですし

穴を開けずに着れば
うんこ漏らしたみたいなの
ビジュアルになるし

かと言って股の間から前に
尻尾を回して着れば
終始フル勃起みたいで
恥ずかしいですし…

恥ずかしいの
基準値が
ようかん…

だから

仕方なかったんです！

ああつ！
ほっぺたに「コンニャク」
さながらの感触が！

わかりましたか！

ああああ

…それとも



僕のような
異形の者が

供につくのは
やはり
嫌ですか



※おもしろ漫画です



じい...

か

し...仕方ないなあ
まあ...そこまで
言うんなら...エヘ

そんなこんなで二人は共に旅すること
なったのであった...次号「通れない場所！
フルチンで通行禁止の」をお楽しみに！

あわる



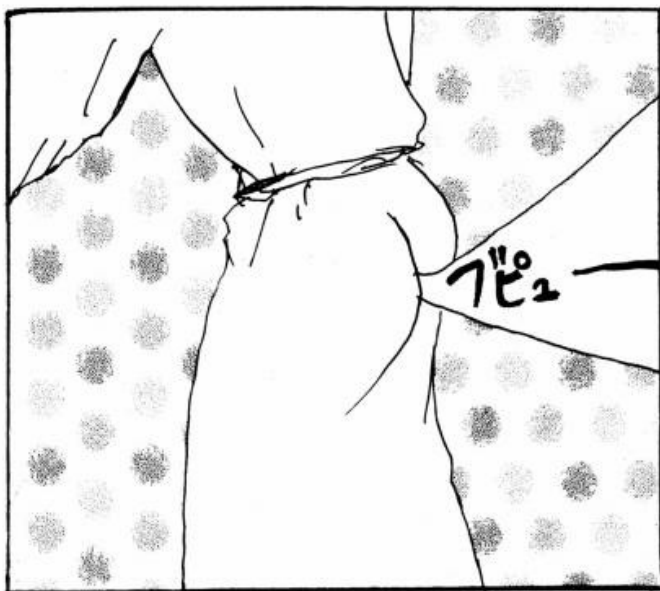
ポロポロ



ドキドキ

ほあ...

かわゆす！

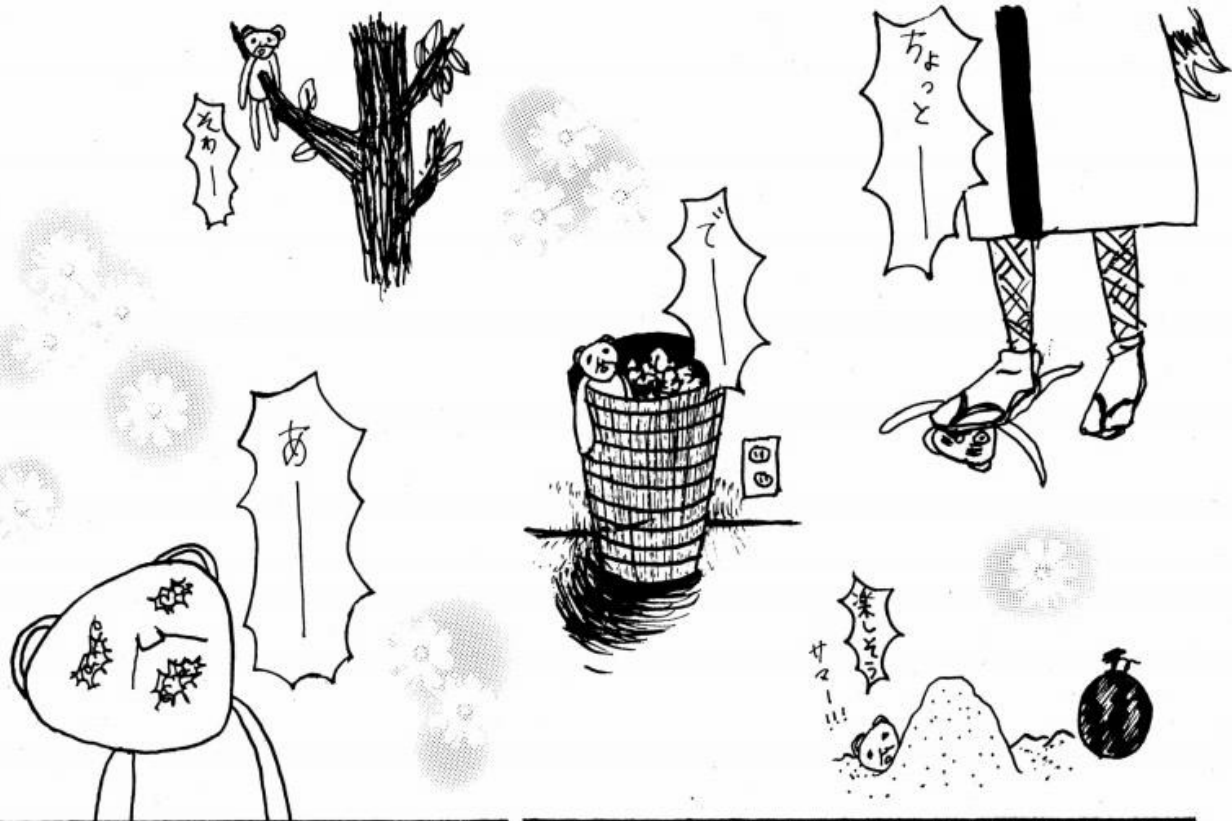


ルンタッタ









おわり

ねえ曾良くん
そろそろ休憩に
しない？

休みたければ
どうぞ
僕は布団で
寝たいので

チクシヨー！

すいません
でした…

ゆめの
まにまに
円谷ノブ

でもさでもさ！
もうお腹も
へったしー！

せめて何か
食べるもの
ないのー？

まったく…
さっき何か
食べてません
でしたっけ？

昨日採った
キノコのこと？

あんなのじゃ
腹の足しには…



曾良君なんて
格好してるの？

ハズカシイ！
弟子がこんな
変態趣味を持っ
てただ
なんて！

はあ？

イヤア~~~~~！
ハレンチ！
ハレンチ曾良！

疲れてるんで
かわせないで
くたさい

すいません

次の日

今日も
おはよう

イ
ラ

その次の日

イ
ラ
イ
ラ

しいてい
くか
だげ
さん
いに



完全なセクハラです
訴えますよ

一体何が
不満だというんですか

何とか
言ったらどうです

これは僕が
処分しておきます

ごめんね？
だってさ...

曾良くんが幻覚でも
笑顔でいてくれるのが
嬉しくて...つい

...

：セクハラとパワハラ
どっちで訴えて
欲しいですか？

エエエエ
訴えるのは
撤回しないの…

そんな言い訳
まったく信用
できませんが…

笑顔ねえ…

そんな幻覚を見てる方が
僕といるより
ましだと言うんですか

カタン…

一体どんな風に
見えるって…？



うん
わかった

あの帽子屋の
扉を叩いて
この手にちようどいい
手袋をちようだいって
言うんだよ
必ずこちら側の手を
差し出すんだよ



強盗
——！



（手袋を）
出せ。

奥細版

手袋を買いに

ヤシガコフ

品切れらしいので
待つことにした。

しゅわ

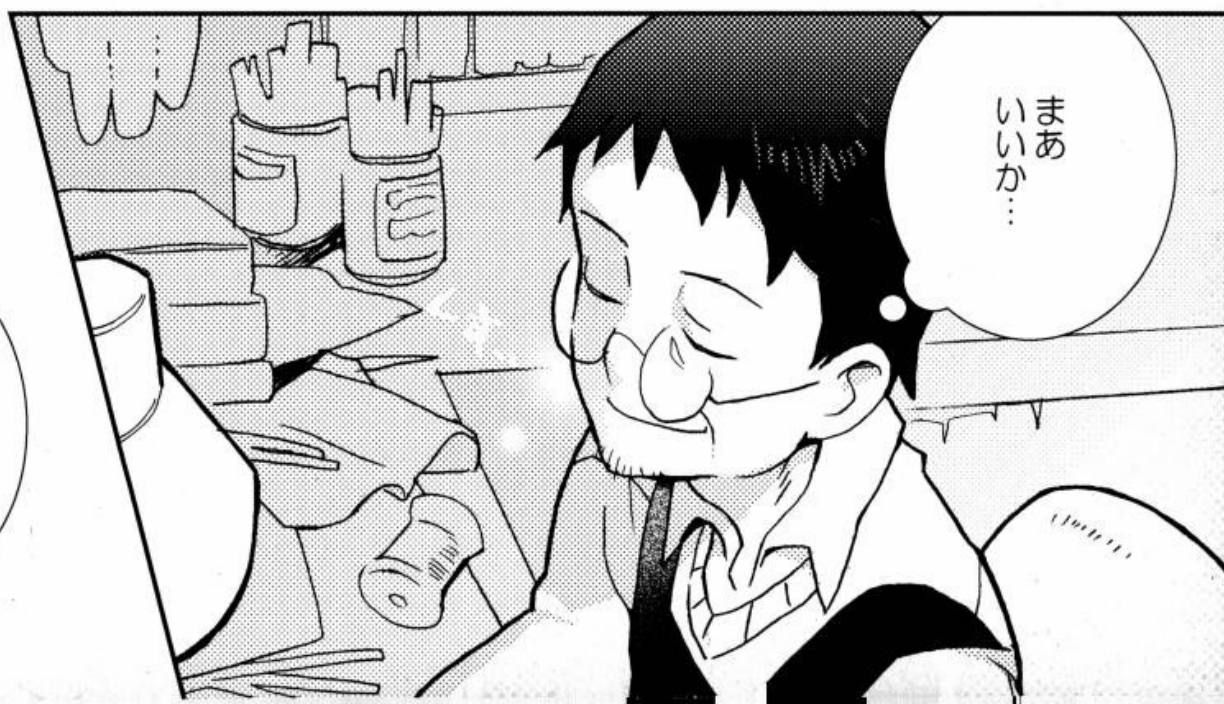
あ、はい
今すぐ
作れって
事ですね…

数十分後



まあ
いいか…

こぎつね
くん





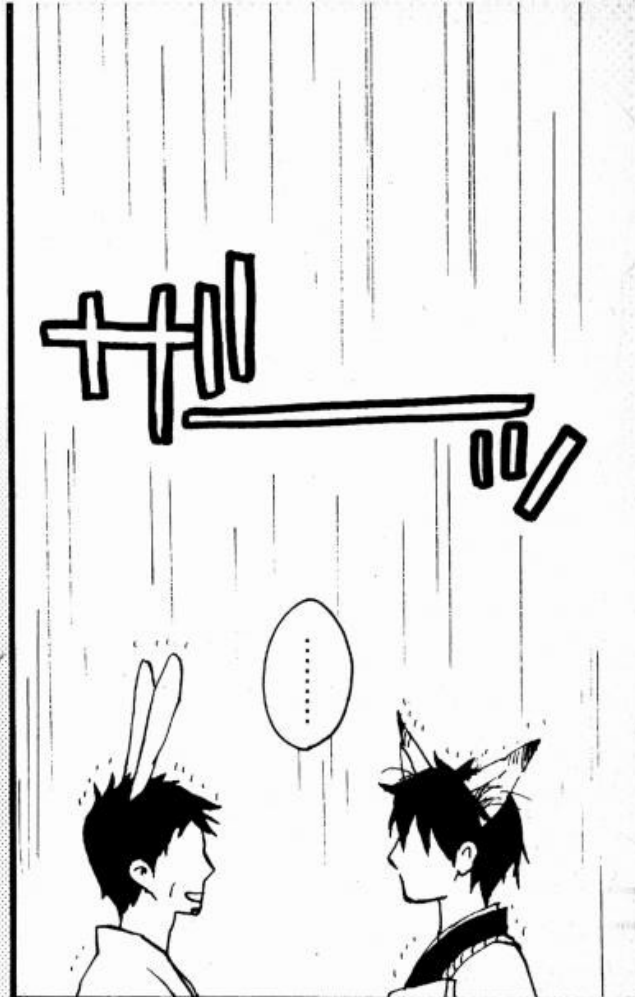


夢道中

二二







お
その干からびた
おっさんの弟子に
なる為に来た
くせにーっ

はあ？

俳聖である
松尾芭蕉とただの
おっさんのあんた
と同じにしないで
もらいたいですね

何ー!!

君なんてその
松尾芭蕉に
会ったことも
ないくせにー!

ま月ニオがっ

へへへへ

残念でーしたー
弟子ならもう
今いっぱい取っ
てくれないよーっ

構いま
せんよ

弟子に
してくれるまで
居座ってやり
ますから

……だ、

だからって
簡単に弟子に
してやらない
んだから……

何ですか？
何か言い
ましたか？

いいえ……









思っていたのに

曾良くん？

どうして 告げてもいない僕の名前を知っているの

曾良
くん

だってー！
うなされ
てたから！

曾良くん？
ひーい

曾良
くーん

……

そーらー
くーん

やかまし
いですね

一度
呼べば
起きます
まったく

……

彼は
ケモノで、

本能で

ほら

もう雨
止んだよ



よかった 僕にはまだ理性がある

おわり

狐雨ノ後、虹立

タカライキヌヨ

つい今し方、雨が止んだのだろう。山の頭には灰色の低い雲が掛かり、それらに混じって白い雲と水色に溶け込んでゆくのが見える。曾良は目深に被った笠の合間から広がる晴れ間を眺めていた。眩く晴れ渡る頭上を美しいと感嘆する訳でなし青い空から視線を逸らす。

「虹……か、厄介な」

刻一刻と形を変える雲が遠退き、いつのまにやら天高くに鮮やかな色が弧状に尾を引き帯になる。その様子をじつと眺めていると、山際に掛かる雲の全てが折からの風に煽られ、細く白く棚引き、すうつと薄くなる。

そして、色濃く美しく透き通る虹が一層鮮明になった。

「厄介な」

消えずに濃く透き通る虹を見て胸に沸き起こる不安を抑えた。虹から視線を正面に移すと、丁度、泥濘（ぬかるみ）をものともせず歩く小間物売りの男が声も高らかに通り過ぎてゆく。

「万葉にも天地（あめつち）の可末（かみ）を祈ひつつ我待たむ……とあるが僕にはどうも畏れ多い……しかし、芭蕉さんが遅すぎる」

笠を被り直した曾良は遠く虹の掛かる山々から目を離して、すぐ右側にある旅籠の暖簾を見遣り店先を覗き込んだ。

（あれは美しいが得体が知れない。それこそ何かが降りては来まいか。古事では高天の原から尊い方が御下りになったというが……）

俄かに生暖かい風が首の後ろから息を吹きかけられたように感じて、びっくりと身体を震わせた。

「……………」

疑わしく思い振り返るが誰一人いない。

ぞくりと背筋が凍るような悪寒と共に、通り抜けた光は肩越しに形を変えて

旅籠の店先に消えた。禍々しいものが通り抜けたのかもしれないと訝しげに見たが、既に何もいなかった。

念には念を押し、目を凝らして見ても気配すら感じ取れない。

気を取り直して笠の紐を結び直すと、覗き込んだ店先に芭蕉がいなか確認をしたが勿論いない。

「……遅い」

八つ当たりしながらに、遅いなどと不満げに呟いたが、一人でいるのだから虚しいもので答える者などいない。かれこれ四半刻になるが、曾良は旅籠の軒下に佇んで旅の道連れたる同行の師、芭蕉を待っていた。

（待ち人來たらず、か）

眉間に皺を寄せ弓なりに歪め、品の良い唇は、物の見事にへの字にしている。白い顔も伏せ目がちの眼すら物憂げだった。男雛のように楚楚とした面持ちは普段から感情が読み取りにくい。年がら年中厳しい仏頂面の曾良が、誠に判りやすく虫の居所が悪いという顔をしている。

もし、今この時に曾良の顔を江戸の見知った者が見たとしたら、それこそ何事かと思うに違いない。

「しかし、遅い……遅い」

（このようなことで腹を立て苛々する自分が忌々しい）

ぎりぎり唇を噛んでいるといつの間にか唇に傷が付いたようで、うつすら血の味が舌先に沁み込んでいる。

本来なら寝つきやすい曾良が何故こんなにも寝不足かというと、不思議なことに真夜中ほど、やたらと周囲が騒がしいからだ。

人が騒がしいのではない、人ならざる者が騒がしい。夜ともなれば、目を閉じて耳を澄まし心研ぎ澄ます。いつもなら旅先の閑居ゆえの寂しさとおかしみに身を投じていると眠くなったのだが、ここ四、五日前からうまくゆかない。（こつとも煩いと考えるものだ）

陽は暮れて夜が明けるまでのよすがが、決して交わるはずがない別天地の者たちが夜の随に溢れ、かまびすしく語り続ける。

始終、遠慮知らずに、くすくす、けたけたと笑う。時には怒りをぶちまけてたたましく叫ぶ。何か訴え掛けてくるので耳を貸すが、ごちゃごちゃと耳障りな音が響くだけで何を言っているだけで結局聞き取れない。

そもそも意思の疎通が図れないのだから意味がない。

数日間の行動を思い返すと、遣ること成すことでたためで、統一性がない。どうも、それらの大半は子供らしい。

夜毎、芭蕉の荷物を開いて散らかしている。

(なるほど、この頃、あの人の支度がいつも以上に遅いのは、そのせいかな)

芭蕉の小汚い縫い包みを気に入ったようで、荷物を散らかし放題、散らかした後で、縫い包みだけをひっくり返したり放り投げたり、あるいは左右で引つ張ったりしている。

それと、曾良を慕わしく思うのか、好んで纏わり付いているようだ。跳ね上がって頭に乗ったり、肩に乗ったりして、ずっと遊んで欲しそうに、構われたそうにしている。それに反して、芭蕉は好みではないのか、あまり近付かず遠巻きに見ているようだ。

まあ、これは見える事実ではないので絶対にそうとは断言出来ない。

(しかし、あんなもの気に入るなんて、悪趣味だ)

今朝も操る者が見えないままで動く縫い包みを見ると、耳元に冷たい風が吹いて、次に言葉が聞こえ始めた。

— あ、み、つけ、うれ、い？

考えても意味を成さない片言なので、それが余計に腹立たしかった。少し様子が違う気がしたが、先の妙な生暖かい風も夜の輩の悪戯かもしれない。

(まあ、憑く気もないらしい、どちらかというと面白がついている)

「おちおち寝られやしない、しかし、なんだって、あれが、芭蕉さんには見えないんだ、迷惑だ」

こちらが気が気でない時も鈍い芭蕉は気付きもしない。それどころか何者にも影響されない顔で幸せそうにすやすやと夢の中だった。

(どうしてあんなにこやかましい輩に気づかないんだ)

鈍感な芭蕉が幸せそうであればあるだけ、益々もって自分が損をしている気になり、芭蕉への更なる苛立ちが募る。そういえば、昨晚やけに腹立たしかったことと言えば、眠れずに行灯の下で尾花沢で世話になった清風に文をしたためていた時だ。

むくりと芭蕉が起き上がり曾良を指差した。

— み、耳、耳、ふわふわ、しっぱ、尻尾、ええ？ あれ？ 曾良君の、けち。

とにかく訳の分からぬ言葉を叫んだ。人を指差して呼ぶもんじゃありませんと一蹴し——まさしく蹴りを入れてお休みいただいた——だが、その後も何度か

目を覚ますこと、しつこく耳がどうの尻尾がどうのと言っていた。

(何が、けち、だ。芭蕉さんにとにかく言われると、無性に腹が立つ)

ざつと流れる雲を眺めてから舌打ちをし、壁に身体を凭れさせると、背中からじわりと温い熱が伝わり始める。じりじりと上昇する気温を肌で感じ、曾良はまたひとつ溜息を吐いた。

「これも全部、芭蕉さんのせいだ、きつと」

とりあえず全部を芭蕉のせいにして心を落ち着かせようとした。

芭蕉という男は甚だ身支度が遅い。

目覚めてすぐの仕度からして呆れる。江戸であろうと旅先であろうと芭蕉の振る舞いは一向に変わらず、当人は至って暢気に身支度に励む。

(まだ、あの人は手荷物を握ねくり回しているんだろな)

いらぬ荷物に手間取って芭蕉は支度を遅らせる。いつしか曾良は待つのがお決まりになった。ある時は旅籠の軒先で、またある時は陽だまりの下で、場所や時間はその時々だが、ひたすらじつと待つ。

(待つのは癪だけれど、まあ、かまいやしない)

「それにしても、やはり僕には解せない。たいてい身なりには気を使わない癖に、あの人は荷物ばかりに気を遣って」

莫迦が、と、言い慣れた恨み言を口の中で噛みしめて曾良は舌打ちをした。

それは何度問うても答えの出ない疑問。

「大事な、か、僕には理解できない」

荷物の中身たるや惨憺たるもので、小汚い縫い包みや役に立たない書き付けを始めとして、とことん不必要な物ばかりが収められている。毎日の支度も遅すぎると面倒なので手伝いしましょうかと問えば、自分でするとつっぱねる、それならば早くしろと急かせば、とうに急いでいるからと唇を尖らせた。

全く始末の悪い小童のような口ぶりだ。

尤も、待つばかりが曾良の性分ではないから、時には芭蕉を置いて先に進んでしまおうが、それも関所を越える手前までのことで、必ずその場で踏み留まり待つのが曾良の良心と優しさの所以だった。

「本当に莫迦莫迦しい」

血相を変え右往左往し追いかけてくる芭蕉の慌てふためく様子を思い出して笑みを浮かべた。

結局、どうあっても芭蕉を待つのだ。

ならば少しでも気分よく過したい。しかしその心とは裏腹にずっと頭上と地面とを交互に眺めて独り言を述べ溜息ばかり吐いている。

自然と唇から零れてしまうのだから仕方がない。

それにしても、このところのお天道様は実に気紛れだった。産まれたばかりの赤子のように、見る間に笑ったり泣いたりを繰り返している。

晴れてこそ緑が生い茂るのだし、御湿りがあればこそ地面が潤い暑さも和らぐ。どちらか一方に偏つては理が崩れよう。故に多くの者には繰り返される夏の天候をよしと考えている。

しかし、長旅に身を置く自分たちには少々具合が悪い。

(雨ばかり続いて、今度は晴天続き……、天照御方は何をお考えなのか)

俯き加減で見た地面は泥濘が乾ききらず、人や家畜の足跡で見ても無残。雨をたつぷりと吸つて湿つた地面は、お天道様に熱せられて湯気を出す。そこから判るのは、少なくとも今日明日の旅の間、自分達が夏の暑さにもがき苦しむのは間違いない。ちらりとじりじりと照り付ける太陽を見遣つて、眩しさに目を細め腕組みをするとそつと目を閉じた。

— そら、そら、ばしよう、あし、と、あぶ、へ、き？

ざつと風が頬を撫でた途端、曾良に誰かが耳打ちをした。あどけない子供の声のように思う。平気？ と問うたようだ。

(なんだ？)

「すいません、師は、まだ上の座敷で？」

金勘定に煩そうな番頭は、さあ、とだけ不親切な返答があり、女中に聞いてくれと目を逸らした。仕方なく辺りを見回すが、問い掛けてもよさそうな丁稚や女中はあたふたと駆け回っており声を掛けようがない。

「……仕方がないか」

座敷まで踏み込んで問い詰め、蹴り上げてから首根っこを引っ掴んで座敷から引きずり出しても良いが、目くじらを立てても曾良自身が疲れるだけだ。

今一度、頭上を眺めて溜息を漏らす。

(また、碌でもないことを仕出かすんだ)

芭蕉は何かと突飛な有様物事に挑み曾良を困らせるが、その実、悪気がないのだから煩わしい。

この頃は特に、しち面倒くさい。

此度は二度目の同行。元々知った仲だから、みるみる遠慮がなくなった。

芭蕉は良い意味でも悪い意味でも我侭三昧で傍若無人。一度でもこうと決めたらがんとして耳を貸さない。だから曾良の言葉など、右から左だ。

それに、愚痴が意外と多いのも難点だ。疲れた、暑い、寒い、だるい、もうちよつと休みたい……と逐一文句ばかり。

唇を尖らせ、頬を膨らませて何度も駄々を捏ねる。

曾良にも叶えられる我侭、叶えられない我侭があるから、その時々に対応をしている。とりあえず、暑いと言われれば自らを盾にして、僅かな日陰を作つてやるくらいはできると思っている。また、寒いなら、自分の羽織や紙子を与えれば良い。そうだ、大抵は、咎めても結局は曾良が折れる。

(まあ、騙し騙し、か……)

もう一度覗き込んだ暖簾の先、二階の客間から芭蕉が、軽やかな足取りでやつて来るのが見えた。

「芭蕉さん、遅いで……、す？」

声を掛けようとして、おや？ 思う。じつと目を凝らすと芭蕉を取り巻く空気が重苦しく、後ろにくねくねと捻じ曲がった霧が浮いている。ひたすら凝視していると、それが芭蕉と同じ姿形になり、こちらを見てにたりと笑った。

(あれはなんだ……？)

目を細め、真剣に凝視するが何もない。

霧はくるくると芭蕉を取り巻いて足元に落ち着いてその場に留まった。何も感じてはいない芭蕉は一步一步階下に降りる。

「ごめんごめん、待った？」

— ね、あ、ぶ……、いよ？ はやく、てを、さ……？

例の子供が再び耳元で囁いた。はつきりとは聞き取れないが、危ないと警鐘を鳴らしているようだった。足元の霧が濃くなりぶわりと浮く。

(確かにこれは危ないのかもしれない)

胸騒ぎに駆られつつ声を掛けようとした時だった。芭蕉は段を十段ほど残して、唐突に階段から滑り落ちた。何をどうしたら、そのように滑るのか、勢いよく芭蕉の足が跳ね上がってつるりと段を踏み外した。

「うひい！」

がたん、がつん、が、どさり、どさつどさつ

馬の嘶きながらの悲鳴を上げ、芭蕉は勢いよく数段踏み外し階下に転がり落ちた。床を踏み抜く勢いで転がる派手な音に、旅籠の者は一斉に振り返った。

近くにいた者はあんぐりと口を開け、またある者は手を差し伸べようとした姿勢で硬直している。遂には宿の客達すら座敷から顔を出し始めた。

「芭蕉さん……」

心底つまらないものを見てしまったと顔を背けてから、それから少しだけ芭蕉に近付いては、地べたに這い蹲った様子を一瞥し、手など貸さずに仁王立ちで見下ろした。その間に芭蕉はむくりと顔を上げて唇を噛む。

涙目で額と鼻の頭を真つ赤して唇を噛むのは、泣くのを我慢している子供のような顔だった。それがまさしく子供の所作ならば、なんと可哀相に痛々しいと感じるが、芭蕉は大の大人だ。しかも初老の男なのだから、するだけ滑稽だ。

芭蕉は一瞬だけ、ばつの悪そうな顔をして、きよろきよろと周囲を見遣る。手を差し伸べようと駆け寄った女中や、座敷から顔を出して様子を伺う人達を余所に芭蕉は頭を掻いて俯いた。

一瞬の沈黙の後、転んじやった、と述べた芭蕉は、ばかりと自分のつむじ付近を叩いて舌を出すと唇を尖らせて曾良の顔を見上げた。

「もう、まつおったら、なんておせっかちさん！」

につこりと笑った芭蕉は、打撲と擦傷のできた膝を隠して裾を直すとすつと姿勢を正して立ち上がる。続いてくると向きを変え、呆然としている番頭に向かつて、うっかりうっかりと、照れ笑いをした見せた。

「芭蕉さん、本当に何やってんですか……」

「何って……転んだんだよ、駄目？」

「駄目です、いけません」

「しょうがないじゃない！ 私は転んでも駄目なの？」

「はあ、駄目ですね……」

「ええ？ そんな！」

「駄目です」

ぼつりと呟いてからこれまでにないほど大きな溜息を吐いた。視線の先、旅籠の整然とした店先のあちらこちら、芭蕉にしか価値のない無駄な荷物が散らばっている。

（本当にいらぬものばかりだ）

「さっさと拾ってください、芭蕉さん」

「ええ、手伝ってよ！」

「嫌ですけど」

冷たく言い放つてから曾良は足元に視線を落とした。

（……まだ、こんなものを大事にしていたのか、この莫迦が）

芭蕉が大切だと小煩く述べている縫い包みがうつ伏せで長い手足をぐにやりとあらぬ方向に捻じ曲げて転がっている。

（これを踏んだら、芭蕉さんが顔を歪めて縋り付く）

そう思うと断然踏みたくなるのが心情というもの。さっさと拾ってくださいと言いながら、縫い包みの柔らかない身体をぎりぎり踏み躪った。

「ええ？ あ、やめて、死んじやう！ 駄目！ 駄目！」

芭蕉は勢いよく曾良に駆け寄り、その足元に縋り付き縫い包みを引つ張った。周囲の者は目を瞬かせ、今度は何事かと、事の次第を見守っている。番頭がおろおろして、止めようか、止めまいか迷っている。頭の片隅で自らの非常識さと周囲への詫びを繰り返すがやめることが出来ない。

「曾良君、やめてよ！ ねえってば！」

「千切れてしましますよ？」

芭蕉は必死で曾良の足を退かそうとしている。その唇を悔しそうに噛んで時々曾良を見上げてきつと睨む。次第に芭蕉の目元には涙が溜まり、地面に向かつて、つ、と落ちた。

その眺めに曾良は密かな欲望を覚えていた。どうこうしたいという肉欲でなく、ただ、見たいという欲求。

自らの歪んだ欲を自覚し、それゆえに自らを罵り、嘲り、無常と背徳感を心に抱き続ける。

こうして痛めつけられた芭蕉は朗らかな笑顔など忘れてしまったように別の顔で喘ぐ。その苦痛の面持ちに心を囚われてしまう。

もつと見たいと思うのだが、曾良の中にはそれで良いのかと問う心もあり、いつも、今一步のところで踏み止まる。じわりじわりと湧き上がる快い感覚は止め様も無い。

（僕は、おかしい）

「脚絆を引つ張ってどうするんです、緩んでしまったじゃないですか」

「だって君が足、どかないから、ああ、死んじやう！」

「莫迦ですか、縫い包みでしょう、これ」

「これとか言うな！ 私の大事な友達なの！」

「はあ、そうですか……」

「そうですよ！」

芭蕉の返事と同時に曾良は縫い包みから足を離した。芭蕉が、え、という顔をして曾良を見上げたが、その足で、縫い包みに手を伸ばした芭蕉の肩をがつりと蹴った。

「つて、いゝ、ぐつ、ん！」

転がされた芭蕉の姿は、手足こそ捻じ曲がついていないが、踏みつけていた縫い包みのように憐れだ。状況を把握できずにいる芭蕉をひと睨みし、曾良は心の赴くままに芭蕉の腹を強く蹴り上げた。横目に見た芭蕉の悔しそうな顔と身体を縮めて咳き込む姿に密かな悦楽を感じている。

「ひつ、ううつ、ぐうつ、がつ……」

ぐつと踏んでから、足先で捻り踵を踏み込んだ。その度、ことに息を詰まらせ涙を流した芭蕉がこちらをじつと見つめている。

「おそろいでよかったですね」

「……が、はつ、そ、ら……ひ、あ、あ、耳！ そら、く……耳……！」

「はあ、なんですか？ 耳をどうされたいんですか？」

「ち、が……、あた、あた……！ つんが！」

頭の隅がじんじんと痺れて、やけに重く、普段よりも過敏に物音が聞こえてくるのが気になるが、芭蕉がそれを知る由もなし、何故に、頭、頭、耳、耳、と昨晩からやたらと叫ぶのか判らない。

「なんですか？ まあ、いいでしょう」

（僕はどこがおかしい）

涙目で苦しむ芭蕉を満足げに見ていると、どこからともなく芭蕉に霧が懸かり、芭蕉を覆い尽くすと、芭蕉と見紛う姿形に変わってにたりにたりと笑う。

背筋の凍る笑みでこちらを見るのは芭蕉ではなく他の者だった。

（これは、いけない……）

曾良はふつと足を持ち上げて芭蕉を解放した。それから縫い包みを拾い上げると唐突に周囲に詫びた。

「申し訳ありません、お騒がせしました」

その横で、幼い丁稚が芭蕉の横にしゃがんで、おじちゃん大丈夫なの？ と声を掛けている。

横目で見た芭蕉の姿はよれよれで憐れだった。肩にはくつきりと足型が残り、腹部も背中も身体のうちが泥で汚れている。その、いまだ苦しうに息を

する芭蕉の様子にちくりと胸が痛んだ。

「芭蕉さん、さつさと立ち上がってください」

「え、え、あ……ひつ、待つてよ、もういくの？ おいていかんといて！」

「おいて行かれたくなかったら、早く支度なさい」

慌てて立ち上がった芭蕉は、苦痛に顔を歪めているが、珍しく周囲に気を使つてか、ぺこりと頭を下げた。

次に軽く着物の襟だけを正してその場にしゃがんだ。その後はなんとも不器用な手つきで草鞋の紐を結び始めるが、不恰好に縦に結んでよれよれになった紐は、結んだばかりだというのに今にも解けそうだった。

（しょうがない、芭蕉さんは不器用だから……）

苛立ちを覚えていた芭蕉は、芭蕉をまめめしく世話をしてやりたい気持ちが湧き上がる。静かな衝動に曾良は心から驚愕していた。無言で芭蕉に近付き、わざとらしく溜息を吐いて、みすばらしく乱れた姿を嘆かわしいと冷たい眼差しで眺め、次に諭すような調子で芭蕉の肩を叩く。

「僕がやりましょう」

「え？」

瘦せた身体をぐいっと引つ張り、その勢いで無理に店先に腰掛けさせた。ぱつと目を見開いた芭蕉の顔が、見る間に赤く染まってゆく。

（この顔は、嫌いじゃない）

「ありがとうは？」

「あ、ありがとう、曾良君、でも、変なの」

芭蕉は小さな声で礼を述べ、その後で何かを言い掛けて口を噤んだ。曾良は気付かない振りで脚絆を結ぶ。芭蕉は俯いて指先をじつと見ているようだ。

（まあ、いいか……）

最後の脚絆の紐を結んだ時、どこからともなく笑い声が響き始める。もしかしたら、旅籠の丁稚が笑ったのかもしれないと振り返るが誰もいない。

肝心の丁稚は番頭の隣で、真剣に十本の指を指折り数えている。

（夜の連中が真昼にしゃしゃり出てくるなど、通常は考えられない、それ自体がおかしい……、それとも気のせいかな？）

ただ、いる、という気配だけは確かだ。

暖簾を捲った時に感じた違和感とは違い、真夜中にきやつきやつと騒がしい輩の声のようにも思う。念のため曾良は周囲を見回したが、特に変わった様子

もなく知らぬ顔で自らの仕事に手をつけ始めている。

旅籠の連中はこれ以上はどちらが揉めないと判断しようだ。

(眠気でおかしくなったか? いや、でも確かにいる)

「どうしたの? 曾良君」

どこからともなく聞こえ続ける愛らしい笑い声に耳を傾けていると、芭蕉が訝しげな顔で問うてきた。

(やかましい、一人じゃあないのか)

声の調子からして複数。けたけたと笑い続けるもの、くすくすと竄った笑いをする者の二つが同時に芭蕉と曾良の周りを駆け回っている。

「曾良君? どうしたの?」

「まあ、いいでしょう」

「なにが?」

ふと気づけば、いつの間にか自分達ですら当たり前のように落ち着いて旅立ちの風景の一部に挿げ変わっているから不思議だ、気を取り直し、曾良は芭蕉に向き直るとひとつ問う。

「いえ、なんでも、なんでもありません、ところで芭蕉さん」

「ところで、ですね」

「なあに? もったいぶらないでよ」

満面の笑みで問いかけを待つ芭蕉は、今まで踏んだり蹴ったりだった事態を忘れてしまったようだ。浅はかだと芭蕉に呆れ気味になるが、一番浅はかなのは曾良自身だと良く知っている。

うやうやしく芭蕉の足に触れ、草鞋をしつかりと足に通させると曾良は手を差し伸べた。それを当然のように手助けを受けた芭蕉は軽く礼を述べて朗らかに気持ちの良い笑顔を見せた。

「ありがとう」

礼を述べる声には何のこだわりも遜色もない。

曾良は芭蕉の着物から泥を払う。到底、取れそうにない泥を叩き落してはたと手を止めた。それから芭蕉を上から下まで舐めるように見て、着替えずともよろしいのですか? と無表情のままに問うた。

「え、あ、着替え?」

頓狂な声を上げ、目を瞬かせた芭蕉は、自らの姿を何度も何度も見下ろし、すつと顔を赤らめて言葉を失った。曾良の顔を見て赤くした顔を殊更赤くして

俯く。着替えなどどうでも良からうが、何か恥じることもあるのだろうか。

「泥、酷いですけど、いいですか?」

「君、意地悪だな! もう! それだって、君のせいじゃないか!」

「僕のせいにしてないでください、芭蕉さん」

「いいよ、もう、誰のせいでもないんですよ!」

「はあ、そうですか、じゃあ、行きましようか、芭蕉さん、置いて行きますよ」

「ええ? いくの? 結局、着替える暇ない!」

「はあ、まあ、世の中、どうでもいいことってあるじゃないですか」

「もう、どうでもいいって? 曾良君ってば、ああもう! しょうがないなあ」
些細な会話をする間も、見えぬ子供が面白可笑しそうに高らかな笑い声を出していた。腹を抱えて転げ回り笑っているようなけたたましさだ。

(まあ、いいか、放っておくか)

頬を膨らませ、幼い丁稚よりも聞き分けのない顔をした芭蕉は満足げに微笑んでいながらも、少し戸惑い気味で視線を泳がせた。

それを見た曾良は、彼から背を向けて暖簾を滑った。すぐさま、眩しい光が目飛び込んできて、きつく目を細めた。一步、泥濘に足を踏み出せば、今日も旅が始まる。

「あ、曾良君待つてよ」

「芭蕉さん、行きますよ、何やってんですか」

縫い包み片手に駆け寄り寄る芭蕉の顔を見ると、先程同様に満足げな笑みが口元に乗せられていた。

「少しくらい待ってなくてもいいじゃない?」

「はあ、時間が勿体無いので、駄目です、さつきとしてください」

きつく論じて、道を先へ行く……と、そこまではいつも通りだが今日は少々勝手が違う。

何しろ付いてくる者が多すぎる。

芭蕉の後ろには、悪趣味にも芭蕉の姿形をした霧が纏わりつき、更に曾良には何処から付いてきたのか子供のようなものが捲きついて離れようとしない。
(悪さをしないならいいんだ、しかし、なんだかおかしい出来事ばかりだ……)
泥濘に嵌り草履を取られたと悲しげにしている芭蕉に声を掛けると、なんとなく頭の片隅がむず痒い気がして首を振った。そのうちに、何故か尻もむず痒い気がするのでおかしい。

相変わらず、笑い声は消えない。

— おんなじ！

何が同じなのか、同じという声が聞こえたと同時に先程よりも頭と尻とむずむずとむず痒くなった。本格的に妙な虫にでも集られたかと思つて、首を傾げると、次の瞬間には芭蕉が慌てふためき、死に物狂いの形相で曾良に駆け寄つてびたりと尻に触れた。

触れられた感覚はないが、確かにびったりと腰に密着する左手の温かさは確かだ。生暖かい手がしっかりと添えられている。

(どうとう芭蕉は色惚けしてしまったのか、芭蕉さんは何を考えて……？)

「こそ、こそこそ、曾良君？ お尻！ お尻！」

「芭蕉さん……」

曾良の脳裏でみしりという音を立て思考が凍りつく。

どもりながら名を呼んでいる芭蕉は何度も曾良の尻をぼんぼんと叩き、撫で回し、あるいは押し付けたりと忙しく手を動かしている。

「曾良君、早くしまつて！」

(何も出してないのに、何をしまえというのだ)

曾良には芭蕉の言わんとする言葉が理解できない。溜息を吐くと芭蕉の頬を勢いよく打ち、続いてその尻を膝蹴りしてからくるりと背を向けた。

「うひい、お尻いい！」

飛び上がって痛がる癖に芭蕉は、お尻！ お尻！ と曾良に向かって叫ぶ。

「もつと蹴りたいので？ 老練したんですか？ 芭蕉さん」

「違う！ 曾良君、お尻！ほんと、お尻大変だから！」

(まあいいか……)

首を捻りながら見上げた空は変わらぬ晴天、道の中央から山の裾野を見れば、今も大きな弧を描いた虹が消えずに残っていた。

旅籠を出てから四半刻しても虹は消えなかった。不気味な煌きで周囲を見渡す架け橋のように天高くに広がっている。

虹を見るなり芭蕉は大喜びで感嘆して早速一句捻ろうと書き付けを取り出したが、その莫迦騒ぎを余所に、曾良は身体の芯から凍えるような捻じ曲がった空気と、迫り来る不安を感じていた。

「蛇みたい うねうねしてない 虹ですけど ばしようつ」

「莫迦が……」

つまらない句にも満たない言葉を捻った芭蕉を一瞥した曾良は書き付けを弾き飛ばして軽く往なすと、自分は虹が見えなくなるまで、予め用意していた旅の覚書を懐から取り出し、旅先までの道順を確かめていた。

「次は、那古を通つて、担籠(たご)の藤波ですよね？」

「そう！ 楽しみ！ それにしても虹、きれいね！」

「そうですか？」

「すこい、きれいだった！」

「はあ、あんなもの、きれい！ と悦び勇んで言う人の気持ち判りません」

「もう、君、つまらない子だな、君」

「つまらなくて、結構です、あんな不可思議なものに気を奪われては、いずれ魂を取られてしまうかもしれませんよ？」

「ええ！ 怖い！ そんなん、言わんといて！ もう、やだ！」

「はあ、そうですか、まあ、いいです、とりあえず、那古までの道程も大変ですから覚悟してください」

古歌に歌われた歌枕の地は芭蕉でなくとも興味のある地、さぞかし美しかろう。担籠は初め旅の立ち寄り先に含まれなかった場所だ。

痛い身体に鞭打つても良いと旅の主人である芭蕉が決めたから向かう場所だった、越中路、黒部四十八が瀬と言われるだけあつて道程は厳しい。

延々と川が連なり、歩いてても歩いてても川が続く。

状況をあざ笑うかのように、流れは強くなり、泥水になり、また頭上から降り注ぐ陽射しは一層強く肌を刺すように降り注ぐ。

明らかに厳しい状況と言えた。馬を借りられれば良かったが都合がつかず、

人の手を借りて川を渡っている。これこそ、命が削られる思いがしていた。

振り返ると芭蕉は息を乱し頬を紅潮させ眉間に皺を寄せ額から汗している。

(僕でもきついくらいだ、芭蕉さんはもっと、辛いだろうに)

芭蕉がこちらを見ないと知っていて、曾良はときめきの眼差しを芭蕉に向け

続ける。今もめくるめく色めく眺めにも似た芭蕉の表情から目が離せない。

こうして人知れず眺めることで、光に透ける鳶色の髪が案外美しいことにも

気付かされたものだが、今日はその観察にも身が入らない。

— や！ や！ め！

川に一歩足を踏み入れる最中も例の子供がしつこく曾良に耳打ちをしてくる。途中の村、那古に近付く毎、より執拗に耳元で囁く。

「やめ、やめ、た、だめ、さ、さ、かが、かが、か、か、ざわ、いい。」

どうしても正確には聞き取れないのだが、旅籠で聞いたよりも数段聞き取りやすい声で訴え、担籠は駄目だから金沢に行けと強く勧めてくる。

曾良は彼らの正体が判った気がしていた。と、その辺りから、その言葉は一部だが徐々に聞き取れるようになり、姿すら見えるようになり掛けている。

（やめると？ 何故？）

問うても返事はない、ただ、駄目、駄目、と繰り返す。

そうはいっても、決めた道程を曲げるのも癪だし、既に半日以上歩き続けている。共に辿り着きましようという約束したものを、到底芭蕉には聞き入れられようもない理由でもって、約束を反故には出来ようもない。

繰り返して耳打ちする声を無視して、じりじりと厳しく照り付ける太陽が見下ろす中を曾良は額に汗を滲ませて歩く。

川が幾つも分岐した場所を一里、二里と黙々進んでゆき、もはや数えられなくなる程度に必死で川を越え、那古まで来た。

海沿いの長閑な村では、人の姿を捜すだけののも容易ではなかった。

やっと見つけた男は下帯一枚で網を手入れしていた。

浜辺まで駆け寄り、男に担籠までの道を問うた。すると、親切に答えてくれたが、いともあっさりと言めておけと引き止めた。

「海沿いに五里進んで向こうの山陰に入ったところで、漁師小屋一つきりだ。なるほど、そのように止められると気が弱る。遠路はるばる訪れても、疲れを癒す宿がないのは虚しい。その保障がないのは老い先短い芭蕉には辛かるう。」

（宿がないのは手痛い。やめろというのは、そういう意味か）

芭蕉には、担籠には辿り着けないと明言してないが、曾良の顔色を見て薄々悟ったようで、不意に顔を上げ、途方に暮れた顔で海の果てを見つめる芭蕉の横顔が寂しげに翳る。

（さて、どうしたものか）

「大変そうなんだ？ それで、行くのは無理そうなの？」

「そう、ですね」

ざっと風が流れて疎らに植えられた松の木が揺れる。ざざざ、ざざざと、音を立てて波打ち際に懸かる白い波は何故だか物悲しい。日中で光にちかちかと

輝き美しいが、夜の暗闇に落ちる前の灰色はどんよりと心の隙間を暗く蝕む迷いのようだし、暗闇に落ちた水面は深く淀んで恐ろしく心の奥まで迫り来る。

それが、風情といえそれが寂しき風情。

日暮れも近い。

（どうすべきか）

無理をしてこの場に一泊の後、担籠へ行くべきか、即、別の道を探るか。

民家の疎らな漁村で宿を探すのは極めて困難。安全な道を選ぶならば、早々に金沢入りを志すのが良い。風情は遠退くが、その代わりに、向かう先の町には夜通しあかあかと照り続ける行灯もある。

（金沢に向かうなら、街道沿いにいくだけでも宿場がある）

人の子の音が遠退いて家路に収まった頃は染まりゆく空の下、草むら辺りの一声（ひとこゑ）を始めに、蛙の声、虫の音があちらこちらで鳴り渡るだろう。

金沢は門人も多く、蕉風に傾倒する者も多い。

更に加賀百万石と言われるだけあって栄えた土地に違いない。

それならば、待遇も良からうから旅の疲れも癒されようものだし、芭蕉が会うのを心から楽しみにしている高弟もいるのだという。いずれの門人に会うにせよ、教養高い文人たちを前に芭蕉が得るものはさぞかし多かるう。

担籠の藤波は残念だが、この先に幾らでも芭蕉が美しい言葉滑らす場所があるはずだ。

草葉も生い茂る素晴らしい季節の色に近づくことに、芭蕉はそれを見て曾良の心揺るがす何かを唇から滑らす。

（僕が行く先は迷い道ばかりだし、どうすべきか……）

「か、さ、ざわ、いい、いい、……で、も、きを、つけ、ば、しよ……」

聞き取りにくい声に耳を貸すのは疲れるが、今も延々語り続ける声は止まない。耳元に冷たい風が吹き、たどたどしい言葉と笑い声。

気を付ける、といまだ言い続ける。

では、これらは何者なのか。見える姿は子供。数は二人。紛れもなく人ではない。頭にはびんと獣のような尖った耳がある、尻にはふんわりとした尻尾が生えている。そのうちの一人は、旅の間で曾良の肩が気に入ったらしい。右の肩にびよんと飛び乗り、につこりと笑んであれやこれやと耳打ちをする。もう一人の子供は曾良の袖をちよいと掴んで離さない。瞬き一つせずに曾良を見上げて、時々何かを納得したようにこくりと頷く。

肩に乗るほうは満面の笑み、袖を掴むほうは仏頂面で表情がない。

よく見ると、彼らはどちらも同じ造作をしていて、清く見目麗しい子供とはこういうものか。闇色の艶やかな髪と射干玉色の瞳、透き通っているが血の気のない紙のようで真っ白い顔をして、小さな唇は愛らしく紅色の玉のようだ。

また、白い着物に緋色の鳥居と同じ色の涎掛けをしている。並んでいる姿は見事なまでに対照的で、一對の稲荷像のようだった。

(ああ、そうだ、狐か)

— かな、さ、いく、が、か、えて、て、…どう？

また、一つ、子供が囁いた。だんだんと鮮明になる言葉。謎掛けのような途切れ途切れの言葉はいずれ明瞭に聞こえてくる。

曾良には思い当たる節がある。

真夜中が騒がしくなるのと同じ、四、五日前。歌仙に招かれた高田で不意に稲荷を詣でた。道すがら佇まいひとつそりとした稲荷があったので、旅の無事を願おうと試みた。幾重にも連なる鳥居を潜り手を合わせ、俳諧の席の後、土産に貰った菓子をお供えた。

そしてそれは起きた。

あるうことか、芭蕉がその供えたはずの菓子をいきなり食べたのだ。啞然とした曾良は慌てて咎めた。何故、大切な供え物に手を伸ばしたのかと胸倉を掴んで問えば、なんとなく手が出たと言われない。

あまりのことに思わず手が出た。頬を張ると同時に、勢いよく芭蕉の身体は吹っ飛んで、その衝撃で社の蝶番にぶつかり扉が壊れた。

どうしようもない莫迦じじいだと罵り、その場はお社に向かって丁寧に詫言した。翌日、宮大工に頼み込んで急ぎ早蝶番を直してもらい、改めて菓子を供えたということがあった。

多分、あの子らは、あの社の主か、いずれかの守り神なのだろう。

彼らの行動を見ていると、どう考えても自分たちを祟る気はないように見える。ならば、どうして一緒に歩きたがるのか。

そればかりはさすがの曾良も検討がつかない。見た目通りで単純に遊びたいだけかもしれないし、腹に一物抱えての行動かもしれない。

それは彼らにしか判らないことだ。

(気紛れか、はたまた、暇つぶしか)

耳のある子供たちの顔を見遣ると、朗らかに笑んだ子が、いいの、と述べて

更ににんまり笑った。もう一人も、表情を変えずにくくりと頷く。

— あ、おぶ。

(おぶ？ 意味がわからん…、とりあえず、金沢に行くのが先決、それにしてもあの子らが、あれだけ鮮明になっても芭蕉さんには見えないのか)

「莫迦じゃなろうか」

誰に対してでもなく口癖のように莫迦と言った曾良は、何故だかやたらと疲れた気がしてがっくりと肩を落とした。すると、芭蕉がどうしたの？ と問うてくる。肩に乗った子供も、どうした、ばか、なに？ と、片言で問い、もう

一人も無言で見上げ、ばか、と口だけを動かす。そこにはあたかも子供が三人いるようだった。

「なに？ なに？ 私を呼んだ？」

「いえ、呼んでませんが、莫迦と言いました」

「えええ？ なんだよ、それ！」

「いけませんか、ばしょう」

「はあ、呼び捨てにすんな！」

「ですから、芭蕉、師匠、と申し上げただけです、いけませんか」

そう述べたのを聞いた芭蕉はふつと頬を膨らませて曾良から顔を背けた。続いて道端にしゃがみこみ、誰もいない場所に向かって曾良の文句を始めた。

「芭蕉さん、誰と話しているんですか？」

「え？ さっきから一緒にいる人、ね、仲良くなったんだよ？」

「誰もいませんけど」

「いるよ！」

「また、毒茸でも食べたんですか、芭蕉さん」

「食べてないよ！ 失礼な！ ねえ、そうですよ」

ね、と芭蕉は誰もいないはずの場所に話し掛ける。そこには揺れる霧が立ち

上り、集まると一度茸のようになつてから続いて芭蕉の姿になった。

(これは、何をしたい輩だ？)

おおよそ芭蕉の笑みとは違つ、何か含みのありそうな恐ろしい笑顔を見せて

いる。その芭蕉の紛い物と目をあわせると、背筋を嫌な汗が流れ悪寒が走る。

額からずるりと一筋の汗が流れた。

こちらの輩も子供たちと同じように、明確な実体を持って留まっている。

「では、そちらの方の身なりは？」

「え、お公家さんみたいな、茸みたいな？」

「意味がわかりません、どっちなんですか……」

「え、茸の人？ でも、自分は俳句の神だつて言い張つていて面白いよ？」

「はあ、神、ですか」

（虹伝いに御くだりあそばしたので……）

事實は問わなければつきりしないが——人ならざる者に問うというのも変な話だが——靄をじつと見据えると、当人が神と名乗るように禍々しいものではないように思えた。その実、尊いものにも見えるから困る。

（悪さはするようだが……これは、危うい、のか？）

見えない者と話す芭蕉に、曾良はしつかりとした言葉で伝えた。

「芭蕉さん、担籠には、宿のあてすらないそうです、それに市振の難所さながらの山を越えなければならぬそうですから、無理はせずにおきましょう」

漁師の男に尋ね聞いた事を、芭蕉には少々大袈裟に伝えた。それが不思議なことがあるもので、口に出してみると何故だか狐の子供達の言葉が正しく、それを信じて加賀金沢方面に向かうのが得策に思えてきた。

（それをどこまで信じて良いか判らないが……）

金沢、と場所を決め、その言葉を聞いた神と名乗る者の靄がにたりと笑い芭蕉の頭を撫でたのが気に入らないが、まずは金沢に参りましょう、と芭蕉に告げた時、子供が囁いた。

——うのはな、やま、とちゅう

曾良にとつては芭蕉の前にいる茸だか、お公家さんだかよく判らない神よりは信用できそうだった。

（ああ、卯の花山か……）

「あるいは、卯の花山の歌枕、俱利伽羅の谷を回つても良いと思いますが」

芭蕉がぱつと顔を上げて、そうだね、と笑んだ。

——それ、いい。おも、つうじ、あ、叶う、そら！

子供がけけらと声を上げて笑つたが、曾良にはちつとも意味が判らなかつた。芭蕉の近くにいた自ら神と名乗つた者は既に身を闇に潜めたのか静かだ。

——そ、ら！ あれ、ひ、あつち！

小さな声がして肩の上ではなく、足元の子供が声を上げた。嬉しそうな声のわりに表情がなくて不気味だが、そのまま、とてと町の方へ駆けて行く。後ろの肩に乗っていた方が慌てて追いかけ始めた。

「あれ……？ 子供？」

芭蕉が不思議そうに首を傾げて問うたので、ああ、ずっと一緒におりましたよ、と答えて曾良も町の方へ一歩踏み出した。

「ええ？ ずっと一緒？ この子たち、曾良君にそっくりだよ？」

「はあ？ まさか」

「君の子？」

「なに言つてんですか……、あれが人の子に見えますか？」

「え、あ、ほんとだ、耳、かわいい、尻尾、かわいい！ あれ？ なんか思ひ出したような……？ あれ？ 尻尾？ 尻？」

「尻つて、なんなんですか、最近、莫迦の一つ覚えのように何かと尻だの耳だの頭だの煩いです、色惚けでもしたんですか、尻に執着するなど、愚鈍です」

「いや、耳？ いや、尻尾？ いや、尻？ お尻？」

混乱し眉間に皺を寄せながら芭蕉がぶつぶつ言っているのを放置し、子供達の行くほうについて歩く俱利伽羅の古戦場近くの宿場に着いた。

（まあ、なんとかなるか）

茜色の空が広がり始めて重い木戸が閉ざされようとしている。月が顔を出すまではもう暫くかかるうか。

宿場に着いた途端、芭蕉はおもむろに食い物屋の軒先を覗き込んで、おなか为空いたねえ、と振り返つた。

見慣れたはずの先を歩く瘦せた背中が、心躍る様子で浚刺として見える。そのように嬉しそうにしている芭蕉は、何か碌でもないこと——芭蕉にとつては取つておきの事柄——を思いついたか、曾良が与り知らぬ間に喜ばしい出来事にぶち当たつたか……、そのどちらかだ。

「あのね、曾良君」

「挨拶もなしに、いきなり話を切り出す人がありますか」

「そっか、こんばんは、曾良君、良い夜ね」

「取つてつけたように挨拶されても気分が悪いです、それに今更、挨拶ですか」

「挨拶しろつて言つたの、君じゃない。まあ、いいや、そう、あのね、曾良君」

「俺びの言葉もなしですか」

「ああ、もう、ごめんなさい！ 私が悪うございました！」

「不満そうですね、何か文句でも？」

「別に！ そうじゃなくて、あれ、見て？」

「なんです？」

軒先から漏れる煮炊きの香りに足を早め、些細な会話に身を置いていて不意にやかましい連中の声が消えていた。また、軒先や戸口の前、道端で火を焚く者達が大勢いることに気が付き、はたと曾良は忙しい日々を背にして忘れかけていた事柄に思い至った。

（迎え火か）

今宵は盆の入り、十三日。どうりで数日前から騒がしい訳だ。軒先や戸口で揺れる数々の焰を見ながら、曾良は静かに問うた。

「芭蕉さん、迎えるべき方は、おられますか？」

「うん、あの、それ、言おうとしたんだ、なんか、静かだね、送るのも一緒に見たいよね、ずっとね。見たい、かな、出来たら、いいね」

「ええ、そうですね」

町外れに木賃宿を見つけるまで、宵闇の中でぼうっと焰が揺れるのを一人してじっと見つめていた。

卯の花山、俱利伽羅を経由して金沢に辿り着いたのは、あたかも盆の十五日の夕刻。その当日は大坂から金沢に通う何処（かしよ）という俳人と運良く同宿させてもらい、翌十六日を迎えた。

やかましかった者達の声が消えて二日。

最初の日に一笑という門人を訪ねたが、昨年冬の内に若くして身罷ったのだと兄と名乗る人から聞いた。一笑は四十を前に、これから謳歌すべき生の喜びも多かつたはずだ。

芭蕉は門人の死に意気消沈し、目を伏せ静かに涙を流した。普段なら出るはずの笑みも漏らさずに、声を殺してただただ悲しんでいた。

奇しくも盆の最中、一笑の追善の句会を一席設けるというので、是非にと芭蕉は二つ返事をして出席を約束した。

「それは、ようございます……」

曾良はそれだけ返事をして、自らが名を連ねるとは明言しなかった。その日の宿への帰り際、人とは、いずれ消えゆく焰だと芭蕉は呟く。

それに対してどう返答してよいか判らなかつた。答えない焦燥感に駆られ、慰めの言葉すら掛けられない自分の無力さに呆れるばかり。

かれこれ二日間考えている。その間、曾良はどうしても必要な席にだけ顔を出し、それ以外は宿で籠りきりになった。

「僕は何を」

ぶつぶつと独り言ばかりが増える。芭蕉を待つ時の独り言とは違う響き。心には暗い影ばかりが落ちる。

芭蕉も心配して笑顔を絶やさずにいたが、それが返って曾良の心に重石をつけた。暗い面持ちでいると畳み掛けるように金沢の門人が芭蕉の世話をしたいと詰め寄つたらしい。相手にその気はなくとも、その役目を奪おうとしているは明白。男は、この二日間も、ずっと金沢のあちこち案内し続けている。実に骨惜しみせず、まめまめしく尽くしているという。

名は北枝（ほくし）という町の鍛冶職人だ。今宵は同じ宿に泊まり、芭蕉と何やら俳諧について話をしてもらっているらしい。

すぐ隣の座敷にいたのだが、自分も膝を交えようとか、はたまた、覗いてみようという気にもならない。

（いつそ任せてしまえばよいのかもしれない）

心に浮かぶ言葉は逃げだつたように思う。

そもそも、曾良が、芭蕉を俳諧の師と仰いだのは、その神懸りの美しい言の葉と、めくるめく俳諧を見事に捌いてゆく様を目の当たりにしたからだ。

その手腕たるや誠に見事。

また、芭蕉は俳諧を糧とはしていないから、とうに人の世の俗と欲を捨て何者にも固執せず清貧であろうとする姿は風狂の人とすら噂されていた。

「立派な肩書きではないか。だが、曾良にしてみれば、普段の芭蕉にとって噂は（まやかし）でしかない。」

芭蕉のように、ありとあらゆるものにこだわり続け、執着する者はいないと思う。つまりは、てんででたらめばかりのどうしようもない人だ。

（あんなの、ただの碌でなし、あれが師だと思つと、些か腹が立つ）

心の中で毒づいて、くるくると表情を変え朗らかに笑う芭蕉の姿を思い浮かべた。普段からやることなすこと稚拙で曖昧、更にまともな発言すらしない。そんな男に同行行脚している自分の神経を疑いたくなる。

ふとした時に発せられる言葉の一字一句が美しいが故に師と仰ぐ。

自らの言葉では語りつくせないその言の葉の美しさ、あるいは、重く心を射止める言葉を聞けば、異論などない。

確かに間違いなく芭蕉は師その人だった。

「結局、あの人がどんなに碌でなしでも、僕が弟子である事実が変わりない」
(それにしても、本当に、毎日、毎日、僕は、何をやっているんだか)

そんな時、再び子供達が騒ぎ出した。今度は身体も透けていない、しっかりと実体のある姿で現れたから驚きだ。

「ばしょ、だめ！ や！」

肩に乗って来た子供が唇を尖らせ、怒り気味に告げた。もうひとりもやってきて膝に座ると唇を尖らず。

「何処に行っていた？ 何かあったのか？」

問うと、子供たちは大きく首を振って、小さな尖った歯を剥き出しにして、うーうーと唸り、その後でわーっと泣き始めた。曾良にしがみ付いて延々泣き続ける子供たちは、だめ、だめ、とだけ何度も繰り返す。

「何が不満なんだ？ お前ら……」

「ふまん、ちがう！ ばしょう！ いっちゃう、め！ め！」

芭蕉がどこかに行ってしまうと行っている。お前たちが付いて行けば良いだけだと思ふと、違ふ、と声がした。それは子供の声などではなく、曾良自身の内なる声だった。

(違ふ、僕が行かなくては駄目か)

いままで、耳を塞ぎ目を閉じて頑なに遮断していたはずの心に光が宿る。

不意に物々しい世界が見え始め、耳の奥で雷鳴が轟く、それと同時に地の底から迫り来る振動と物々しい音が響き始める。

(そうか、行くべきなのは、僕か)

心ではんと何かは弾ける。そのうちに、いつの間にか真剣な面持ちをした子供達が一つ所にある襖の左右に座して勢いよくその襖を引いた。

閃光と雷鳴が座敷から流れ込む。

ぱつと棚引く白い雲が現れては消えた。続いて架空の雨が畳を叩いて灰色の雲の合間を紫色の雲が引き裂いていった。俄かに雲が晴れると、続いて目前は緋色に変わり幾重にも重なる鳥居が曾良を通り過ぎてゆく。

目を閉じてはならないと心の奥で声がしたので、逸れに従い見続ける先は緑続いて白に。色をなくして眩しく輝き、目を開けていられない光で溢れた。

耳障りな鈴の音、笙の音が高く響き、ふと無音になった。

(何故今まで聞こえなかったのかというほどの轟音だった)

それから訪れたのは闇だ。

「闇……」

心に広がる闇と同じ色をした襖の奥から芭蕉の声が聞こえ始めるたが、既に正気ではない奇声と言動が響いて耳を劈く。

曾良は一目散に駆け出した。

不意に風が吹いて襖が立ち上り曾良を取り巻く、すばやく流れる雲が頬を打ち付ける。自らの足とは思えない韋駄天のごとき速さだった。

ふと、急にふわりと何か掠めたので首を捻り右を見ると毛の塊が揺られている。景色が変わり、雲は晴れて万華鏡と鏡張りの通路を抜けていた。

そこに映る姿は異形だった。どうやら毛玉は曾良自身の尻尾のようである。駆けながら軽く触れて引く張ると確かに痛いの、間違いなく尻から生えているようだった。

ならば頭にも耳があるのか？ そつと触れば確かに獣の耳が付いている。

(あの子達が何かしたのか)

狐の子供達の悪戯と取るか、餞別と取るかは別としても一過性のものに違いない。しかし、なんと面妖な有様だろう。莫迦莫迦しいにも程がある。

「狐か……半身半獣は、少々いただけない……」

(だが、今はそれどころではない……芭蕉さんはどこだ?)

芭蕉の甲高い奇声と笑い声が轟き、続いてぱたと逃げ回る音、誰かの泣き叫ぶ声がした。

ぱつん、と襖を開ける指先には普段よりも尖って鋭い爪が付いていた。

開くが誰もおらず、右の襖を開き、左の襖を開き、音のする方向の襖をどんどん開けて奥に進んだ。三つ、四つ、五つと開いてもまだ辿り着かない。

六つ、七つ、八つと襖に手を掛ける。煌びやかな装飾と、錦絵の屏風、浮世絵が浮かんで消える。次には大きな枕絵の壁が現れ、それは触れずとも回転して奥の間への入り口になった。

(おかしい……)

なんと仰々しくけつたいな仕掛けをするものか。よくよく考えると、だいた自分が泊まった旅籠にはこれほどの座敷があるわけもない。

耳を劈く轟音や、派手な雅楽が鳴り響けば、他の座敷の者や旅籠の者には伝わらない訳がない。

(これは絵巻事か?)

歪められた場所であり、現実にある場の音ではないと曾良は悟った。

これで最後の襖、見事な錦絵の描かれた全体的に緋色の襖に手を掛け、緊張のうちにすつと襖を引いた。

『ほう、遅いよのう？ こやつはもう、賛、同然じゃて』

頭に響く声は誰の者だったか。

(なんだこれは……)

からからと笑う声に、かたかたと拍子木の音が混じる声そのものは芭蕉のそれに聞こえるが、全体の抑揚に違和感があった。

彼はいい年をした大人の癖にあどけなくおつとりと話す。

時にはぎやあぎやあ煩いこともあるが、普段からわりと穏やかだ。

だからと言つては何だが、この場で堂々と座して不敵に笑み公家のような独特な調子での芭蕉と、男に馬乗りで狂気を晒す芭蕉のどちらが本物と問われれば間違いない後者が本当の芭蕉だ。

(これは、神と名乗る不屈者の仕業か)

『煩い、消えろ、この化け物』

『ささかしいのう、まあ、よからう、気に入ったぞ、しかし、なんと滑稽な格好よのう、小生意気な稲荷の小僧どもに誑かされたかえ?』

甲高い笑い声が轟き、次に、曾良とやら、迎えに来たお前自身がこの場をなんとかせんかいなあ……と声が響く。

『曾良とやら、そういつた獣臭い様も似合うぞ? そうじゃ、芭蕉はそれが気に入りのようじゃぞ? 耳だの尾だのを、ひけらかしてやれば良いであらう』

笑い声を轟かし錚の音を激しく鳴らすと、無理難題を押し付けて、揺らぐ鶴の向こうに溶け込んで行き、それっきり気配すら消してしまつた。

『誑かされてたまるか、僕が好きで来たんだ。第一、芭蕉さんは僕がいなくて旅など出来ないんだから、ここに僕がいなくてどうする』

(ここは、少々見込み違いな旅先だが……)

薄暗い座敷の片隅には絢爛豪華な座敷には不釣り合い枕屏風があり、広い座敷の左右には行灯が一つずつ。

座敷内を注意深く見回すと、枕屏風の向こうから飛び出してしまつたのか、堅そうな枕が芭蕉と男の近くに横倒しで転がっている。

肝心の芭蕉はいまだ男に馬乗りで、その首を絞め上げ、続くはずの命をもぎ取ろうとしている。組み伏せられた男は昏倒しているようで、ぐつたりと頭を

垂れていた。

二人の姿をしつかりと横分すると、乱れきつた着物は肌臍で、肩口からずり落ち脱けそうだった。また、前も後ろも関係なしで、あちこちが破けたり、擦り切れたりしている。中でも酷いのは臀部で、酷く叩き合つたのだろう、その辺りは特に痛々しく赤い血が滲んで変色していた。

(早く止めなければならぬ)

だが、暗示をどう解けば良いものか。

『芭蕉さん』

呼ぶと男の首に手を掛けていた芭蕉が、ぼんやりとこちらを見た。その眼差しは胡乱として、依然狂気を宿し「こうこうと焰を燃やしている。

顔色は悪く土気色で紫色に腫れ上がった唇からは、絶え間なく涎が垂れているが、芭蕉は拭おうともしない。ぶくぶくと泡のようなものを吹いて、何かを言っているようだが、言葉すら聞き取れない。

(芭蕉さんは間違いない正気ではない……、前に茸の毒で頭をやられた時のようになつてしまつている)

襟をすつと正し深く息を吸い込み、芭蕉さん、と三度名前を呼んだ。曾良にたつた一言で、全てが収まるような気がしていた。

たつた一言だ。

いつも曾良は重要なはずの言葉を紡ぎ出せない。それも告げるために十倍も二十倍も余計な言葉を紡いでしまふか、一言も告げずに過こしてしまつた。

(迎えに、来たんだ、僕は)

口の中で呟くと、座敷にずかずかと踏み込んだ。奇声を上げたが、動じずにずんずん進み、芭蕉を見下ろした。飛び掛ろうとした芭蕉の首根っこを掴み畳に叩き付けてから、胸倉を掴んで顔色の悪い芭蕉の顔をじつと眺めた。

『芭蕉さん』

いつも告げたかつたのは一つだ。迷いながら、言えずにいたのは、これからこの先を未来永劫、共に旅をしたいという心だ。焦点の定まらない瞳でこちらを唸る芭蕉の両頬を張つてから、すうつと息を吸い込んだ。

『芭蕉さん、一緒に見ると約束したじゃないですか……』

しんと訪れる静寂、御意にござい、と声が轟く。錚の音、何者かの雄叫びが荒々しく捲き戻り、曾良と芭蕉の横を急ぎ早に通過した。ふつと生暖かく生臭い風が吹き、それを掻き消すように冷たい突風が横からざつと空気を洗う。

道なき道を捲き戻し、風景は酔いが回りそうに忙しい。目を閉じ、芭蕉を抱きしめながら終りを待つ。

不意に、ぱつん、と襖が閉まる音がする。

襖の左右に行儀良く座した子供達が静かに顔を上げた。神妙な顔がぱつと笑顔に変わりにっこりと笑って、そら、おかえり、と片言で告げた。

「芭蕉さん」

名を呼ぶが返事はない。

戻ったのだから、芭蕉も助かったと解釈したが、いまだ目覚めないのは何故か。曾良は頭を掻いてから、大きな溜息を吐いた。

（耳がまだ、ある）

目を見開いたままで固まっている芭蕉の顔をじつと覗き込み、胸倉を揺すると、その首がぐらぐらと揺れて涎がつうと垂れた。その後、突如カッと見開かれた眼が急激に揺らぎ、赤い焰が消えてなくなると水色になり緑に消えて、最後にはいつもの鳶色の眼差しに戻った。

「芭蕉さん」

垂れたままの涎を拭き取り、滲む涙もそつと拭い去った。ひたすら芭蕉の名を呼んで身体を揺さぶっていると、次第に土気色だった頬が白く冷めて、徐々に薄紅色に染まった。

そうして、人らしい顔色になった時、ぴくりと芭蕉の指先が動いた。

「あ、れ？」

芭蕉が目を瞬かせた。状況を把握していない、何も判らないという顔で、自分がどれだけ莫迦な暴挙に出ていたかなど、覚えてもいない。

「曾良君、何？ 私、なんで、こんな風なのかな…、もう、お尻が痛い…」

「さあ、何故でしょうね」

曾良は事と次第をしらばつくれるつもりで、老練してしまったんですか、と答えた。身体を起こした芭蕉は少し身体の痛みを撃てた後、座敷の隅でぐったりと寝転がる北枝を見て目を丸くし、きよろきよろと視線を彷徨わせた。

いまだ目覚めない男には、別の暗示がかけられているようだ。

そんなものは後で解くのがよからう。曾良の身なりは今少々常識の範疇を越えているのだから、見せられたものではない。

「ばしょう！ へいき？ そら、おむかえなの！」

襖の横から駆け寄り、曾良に飛びついてから、おそろい！ と曾良の獣耳に

触れた。もうひとりはお尻尾に顔を埋めて嬉しそうだ。

「あれ、やつぱり！ 耳！ 耳！」

芭蕉は嬉しそうに曾良の顔を見上げると、これ触りたいって思ったんだよ、と緊張感のない言葉を発した。子供たちを押し退けてまで話すことかと思うが目を瞑って許した。

「はあ、そうですか…、と申しますか、前にもこのようなことがあったのですようかと聞いてもいいですか、芭蕉さん」

「うん」

「おそろい！ やくそく！ またあとで！」

子供達が嬉しそうに駆け回り、襖の向こうに消えた。笑みを零して頷く芭蕉の頬を再び打った曾良は、きりきりと犬歯で唇を噛み、莫迦が、と呟いた。

「あ、駄目だって！ そんな顔しないでよ」

急に落ち着き払った顔をした芭蕉が唇を示らせて、駄目、と曾良の唇に指先を触れさせた。

「私、そんなに君の期待、裏切つてばかり？ そうだよねえ、でもさ、一つくらい、叶えてあげれると思うんだ、今だけでも」

にっこりと笑んだ芭蕉は目を細め曾良をじつと見た後で、その髪を撫でると白い額に唇を押し付ける。

冷たい唇が軽く触れて、舌先が温い温かさで、ちよんと触れる。

「な…に、するんですか……」

「何、じゃないよ、これ約束ね」

「はあ…なんのですか」

「ほら、だって、さ、旅をしようっていったじゃない、ずっとね。離れてもずっと旅は続くよ」

ね？ と念を押した芭蕉はいつもより数段落ち着いて見える。

「さて、起こそうか…、それにしても北枝君、大丈夫かなあ…」

「はあ」

返事をした曾良は、じつと芭蕉を凝視した。

雲を掴むような人だと、誰かが芭蕉を噂したが、今曾良の前にいる芭蕉という名をした、半ばうつけの碌でなしは、確かに得体が知れぬ、掴み所のない飄々とした男に違いなかった。

一 蛇 足

さて、金沢から小松へ歩むと、その土地の産土神として鎮座する稲荷を祭る大祭があると道すがら聞いた。

この頃は子供たちは夜しか姿を現さなくなった。折角芭蕉にも懐いて、小さい曾良君たちどこかな？と呼ぶと喜んで姿を現し、嬉しそうに芭蕉に飛びついたのに残念なことだ。ただし、悪戯をやめる気はないようで時々、曾良が真剣に物事を考えている時、おそろい、と、二重に弾む子供の声がどこからともなく響いて、曾良の頭には獣耳、尻には尻尾がぼんと生えた。

一向に消えない耳と尻尾に翻弄され、夜ほど野外に出るのを曾良は嫌った。そこで祭りの朗報。祭り好きの芭蕉が飛びつかない訳が無い。嫌がる曾良を芭蕉が祭りくらい良いじゃないと言いつけて連れ出そうとした。

それで仕方なく芭蕉のお供をする羽目になっている。嫌がる曾良を芭蕉が祭りの後ろに付け、綱代笠で尻の辺りを隠して歩く。少々不恰好だが致し方あるまい。

(これは全然喜ばしくない、不愉快だ)

鳴り響く太鼓に笛の祭り囃は、先だつての悪戯な輩——神と名乗った者のことだ——の、莫迦な暇つぶしを思い出させて癪だったが、芭蕉が楽しい気分であるのだから、まあいいか、と諦めた。

ちなみに、くだんの神が嵐のように去って芭蕉は元に戻ったのだが、命をもぎ取られかけた男も至って無事だった。ただ、その時の記憶があまり無く、贅にされそうになったことは覚えていないようだった。本人は狐に化かされた周囲の者には話しているようだが、あながち間違いでは無い所がお笑い種だ。

いまも芭蕉の元を訪れて世話を焼いているのだから問題はない。

祭りは煌びやかに続いている。子供たちも祭りが嬉しいのか、いつのまにかぼんと現れ、尻尾と耳を丸出しで駆け回った。

おかしいことにそれを周囲の者も気にした様子がない。もしかしたら、これらは自分達にしか見えないものなのかもしれないと曾良は思う。ならば、不恰好に隠しているも自分の耳と尻尾も、実は見えていないのかもしれない。

(とはいえ、用心するに越したことはない)

ふと、にこやかな子が肩に乗りせがむ。

——いなり、とりい、いなり、とりい！

下を見ても、小袖を掴んだ表情のない子がこくりと頷く。この頃の子供達はこのある毎にこればかりを囁く。

(家が恋しい頃なのかもしれない)

気紛れで付いてきたのか、何か理由があつて付いてきたのか、それはいまだにわからない。何しろ聞いても、やくそく、おそろい、としか言わないのだ。

「曾良君、ね、稲荷だ、あの子達、ここに来たかったのかな、なんか、誰だったかが言つてたよ、全部、繋がっているんだって」

「何がですか？」

本当に彼らは気紛れで付いて来たのかもしれない。出入り口を壊されて見失い、気が付けば迷子になったと、そんな所か。

「稲荷のお社の向こう、すごいね、何処にでも行けるんだってさ」

興味なさそうに、そうですかとだけ返事をして、曾良は駆け回る子供達に向かい、心の中でどこへでも好きな場所へ共に行けるのか、と問うた。

勿論返事はなく、笑い声が響くだけだ。芭蕉は話続ける。

「あと、狐って、稲荷の鳥居を多く越すほど格が上がるんだって、だから鳥居が潜りたいのかもね、君もさ、神社とか本当に好きだよ、学んでしまいうらいでしょ？ 狐と一緒にあ、あれだけど、鳥居を越したら徳が積めるかも」

曾良は少しだけ弱ったように眉間に皺を寄せて、やはり、そうですかとだけ答え、あどけない子供達がきやきやいと嬉しそうに鳥居の向こうに消えてゆくのを溜息交じりで眺めた。

手も振らず、振り返ることもない。

去り行く姿を見届けて、暗がりに揺れる行灯と祭りの松明から目を逸らすと、不意に芭蕉が笑いかけ、何も言わずに手を差し伸べた。てのひらは、ぎゅっと曾良の手を握り込んで離さない。強引なてのひら伝いの温かさに心の沁み曾良の心は少しだけ晴れて鮮やかな色に染まった。

「また、いつか」

言いながら思いがけず笑みを零し、見上げる芭蕉を視線をがち合わせ、曾良は何故だか妙に面映い気持ちになり、いたたまれない気持ちのまま、すつと視線を鳥居の向こう側に移した。

曾良から耳と尻尾が消えたのは、その後すぐのことだった。

今宵は此れにて



きつねちゃん、伊佐見。

な…なんて
ことを……

ブラブラと
吊るしっぱなしに
してるから
悪いんですよ

やっぱり君が
犯人か
チクシヨー!!!

こんなかわいい
ぬいぐるみに
なんてことするのー!

天田千しんがききこえてる……

ザンザン

ハロー……

このっ
人でなし

ちよ…
ちよつと
言いすぎた!?

あ…

あのね
曾良く

……芭蕉さん

うっ…

ニヤッ

よく判り
ましたね……

まさか弟子が
人外だったとは……
世も末だよ！

マーフイー君の
あれは
狩獵本能
なんだろうか……

モー！

なんですか
狐が俳句を
詠んだら
いけませんか
人種差別
ですよ
それに今日び
珍しいことでも
ないでしょう

た!!?

なんでも
ないです

ちよう……
曾良君
どういう
こと!?

秋の弟子
化けるのって
おかしい

現に
清風さんだって

た

終



朝も。

朝も昼も夜も！

まっねそらくん

瀧賀八十



夜も♡



昼も!



END

話唾眉

飴

口に飯粒
ついてますよ

美味しいなー
このいなり寿司

お昼ご飯用に
前の街で
買ったって
よかったね

もぐもぐ

んも？

あ

狐だ

ずっとこっち
見てるね

どうしたん
だろ

：腹を
空かして
るんですよ

あ そうか
狐っていなり
寿司好きって
いうもんね

お腹空かして
るんならあげたいけど
私全部食べちゃったし…

曾良君



そうですね

曾良君：
なんか頭伸びてない？
頭蓋骨成長期？

何をまた
変な事言っ
てるんですか
はったおし
ますよ

じゃあその笠
とってみてよ

頭が伸びるって



耳が！
曾良君耳が！
耳がはえてる
ー！

そら耳ぐらい
はえてますよ
耳無し芳ー
じゃあるまい
し

…ついに
ボケたか
バカジジイ！
頭に耳なんて

横についてる
人間の耳じゃ
なくて頭！
頭ー！

ぶっ殺される
覚悟は
いいですか
芭蕉さん

何故にー！
私じゃないよー！

そんなわけない
でしょう

うおおおおおおお？ しし

この耳：
付け耳とかじゃ
なくて直接
曾良君の頭から
生えてるみたいだけど
大丈夫なの？

別に身体に
異常はありませんが
気分の良いもんじゃないですね



何でいきなり
曾良君の頭に
獣の耳が…

何か悪いものでも
食べた？

は！まさか
さっきのいなり
寿司が！？

それだったら
芭蕉さんにも
生えるはず
でしょう

あ、そっか

……しつばまで…
形的にこの
耳としつぽは
狐の様ですが…

少しずつ
狐になって
いるという事…か？

ななな
なんて曾良君
そんな冷静
なの！

尻から変なもの
生えたら
もうちょっと
慌てるよ！？

…さっき
の狐…

まさか…



僕を化けさせ
仲間に
入れるつもりか

狐は神聖な
生き物でもある…

礼のつもりかも
しれないが…

ええっ！

どうしよう！

このままじゃ曾良君
狐になっちゃうかも
しれないの！？

かもしれませんね

何でそんな
冷静でいられるんだ
君は！

あ！
そっだ！良い事
思いついた！
曾良君こっち向いて！



転 職 の ス ス メ

よしもり

七拾九頁



ありがとうございました!

狐耳そらくん 
描けて楽しかったです!

 いなり寿司でも
← 食わせときます。



<http://1sulky0aooooo.web.fc2.com/> まばかにる

お い な り 伝 説 河 合

かしわぎもちこ

八拾九頁



いろいろとすいませんでした
漫画はアレですが普通に
かわいい曾良くんが好きです
ホントです...

もちこ

<http://www26.tok2.com/home/edobashi/> 江戸 藤 キャッツアイ

ル ン タ ッ タ

knps

九拾参頁

ありがとうございました!!

楽しかったです。描きたいなと思った
ものが描けてしあわせです。



<http://www.geocities.jp/ymnsmj/> まばかにる

ゆめのまにまに



円谷ノブ

九拾八頁

C 2 <http://noby.pya.jp/>

奥細版「手袋を買いに」



耳は白色か黒色か。

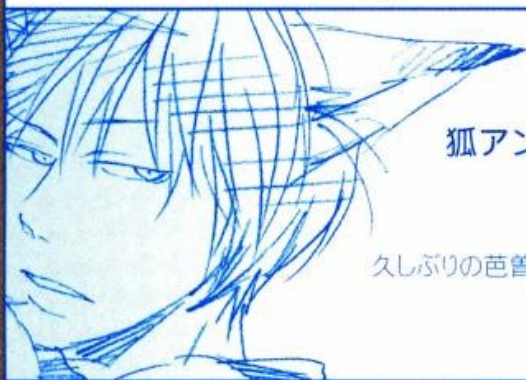
↑悩みどころでした…。
 こんな事で悩めるアンソロそうはねえ！
 狐アンソロ発行おめでとうございます！
 コンセプトを聞いて浮かんだのが童話パロでした。
 色々スイマセン…「何でも大丈夫」との事だったので
 時代も世界も好き勝手にさせていただきました。
 パラレル描くのは初めてですが楽しかったです！
 （めがね松尾が描きたかったというのはヒミツだぜ）

ヤシガニヨフ

巻〇参頁

ジョジョ 葵 <http://rinrin.saiin.net/~vivi/kstn/jyojyoen/>

夢道中



狐アンソロ発行、おめでとうございます

狐しっぽがたまらんですふかふか首に巻きたい
 うさぎに力をいれてしまった感がありますが
 久しぶりの芭蕉楽しかったです、ぎりぎりな曾良くんの話でした
 お誘いどうもありがとうございました

200807. 嶋二

嶋

二

巻〇七頁

メ ラ コ リ <http://nici.daa.jp/gin/>

狐 雨 ノ 後 、 虹 立

タカライ
キヌヨ
壱 壱 八 頁



祝!

これが私の御狐様
発行おめでとうございます
とっても楽しんで書きました！
イサたんありがとう～感謝v

蒼火 / タカライキヌヨ



<http://www.takarai.com/sb/>

<http://www.takarai.com/sb/>

蒼

火

朝 も 昼 も 夜 も ! き つ ね そ ら く ん

瀧 賀 八 十
壱 参 六 頁



狐 曾 良 ア ン ソ ロ 発 行
お め で と う ご ざ い ま す !

曾良狐には是非、
全裸で赤い前掛けとかしてほしいです。

<http://aps.sadist.jp/> A P S

眉 唾 話

飴
壱 参 八 頁

お誘い下しっや
有り難うございまーた！



狐 耳 万 歳

<http://mutou607.sakura.ne.jp/>

無

稿

アンソロジー発行 おめでとうございます。

普通に大昔からファンの方々が来て筆を交わしているのでも涙目
がなりました。貴重なページをしかたありとうございませう。
身の程知らずなのは本人が一番理解していると思えます。



目出 鯛男(43)

あゝ、荒野 <http://kokiakokia.jugem.jp/>

某ノ意 こきあ



<http://tegoshihara.web.fc2.com/>

某ノ式 手越原徹

曾良くん狐パラレルアンソロ 発行おめでとうございます！

まさかの狐パラレルにびっくり。
でもふさふさしっぽを描けてしあわせでした。
今からアンソロを拝むのが楽しみです！
(役に立つどころか足引っ張ってしまい焼き土下座…)

小枕



作者近影

チヨリズム <http://plus.chiyorism.com/>

某ノ象 小枕知寄

アンソロジー発行 おめでとうございます！

たくさんのお狐様に囲ま
れて幸せのキワミです。
このような素敵な企画に
お招きくださって本当に
ありがとうございました♡
シマ



とんねる <http://tunnel.secret.jp/>

某ノ肆 シマ

ギャグマンガ日和 河合曾良 狐パラレルアンソロジー
これが私の御狐様

まさに妄想が形になったかのような

夢のようなアンソロジーでした。

無理を承知でお願いしたにもかかわらず、快諾して

いただいたいた執筆者様方、本当にありがとうございます！

読んでくださった方も、いかがでしたでしょうか。

こういうのもありだな、と思ってくだされば嬉しいです。

狐耳って（パン）いいよね！（パン）

ギャグマンガ日和 河合曾良 狐 パラレルアンソロジー

これが私の御狐様

誌名『これが私の御狐様』	発行日…平成二〇年八月十五日	発行元…伊佐見（黒バラ）	印刷所…日光企画	…松本コロタイプ光芸社	連絡 http://vivan.sakura.ne.jp/kb/pepper_deka@yahoo.co.jp	イラストカット協力…白部屋マユ	注 意 この本は、一個人が趣味で発行した非営利のアマチュア同人誌です。 原作者様・版權元とは一切関係ありません。 無断転載・転売（ネットオークション含む）の行為は一切禁止いたします。 関係者への送付、閲覧は固くお断り致します。	
--------------	----------------	--------------	----------	-------------	---	-----------------	---	--